

41978

教科書文庫

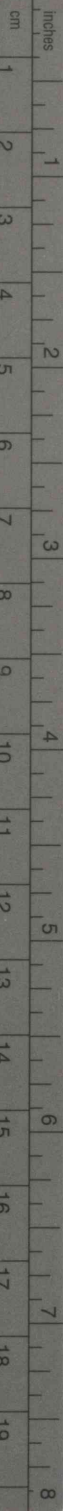
4
810
41-1937
200030
2221

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

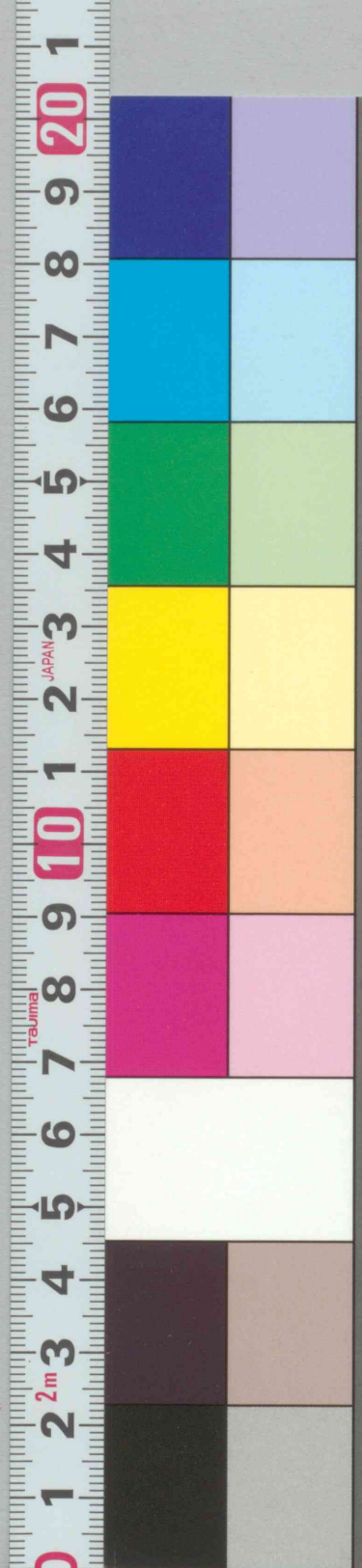
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3759
Iw1
資料室

國

語

卷七

改訂版



資料室

395.9
Iw1

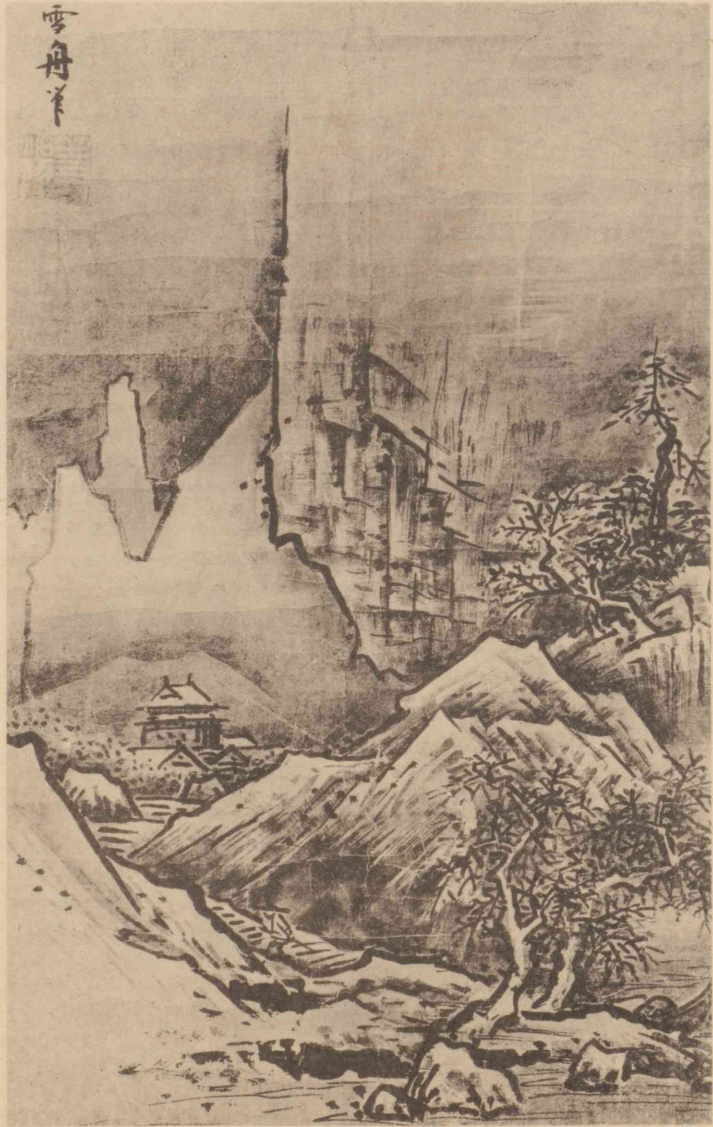
日一十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

岩波編輯部編

國語

改訂版

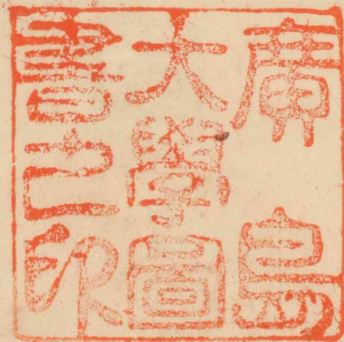
岩波書店刊



雪舟筆

雪舟筆

冬景山水圖



國

語 卷七 目次

一	結晶の力	島崎藤村	一
二	歌の響	島木赤彦	八
三	松風	西源實朝	一六
四	萬物の聲と詩人	北村透谷	三
五	望郷五月歌	佐藤春夫	三
六	舞へ舞へ蝸牛	(梁塵秘抄)	六
七	源氏物語論	本居宣長	六

八	平重盛	(平家物語)	四
九	平家の都落	(平家物語)	五
一〇	戲作三昧	芥川龍之介	六
一一	寒山拾得	森鷗外	七
一二	隨筆の説	五十嵐力	八
一三	桃の木	清少納言	九
一四	法師の話	吉田兼好	一〇
一五	學問	松平定信	一一
一六	雅文四篇	橋千蔭	一二
	隅田川の雨		

	曇る夜の月	村田春海	二九
	砧を聞く	清水濱臣	三〇
	夜學	中島廣足	三一
一七	象山と松陰	徳富蘇峰	三三
一八	ケーベル先生	夏目漱石	三三
一九	俚諺論	大西祝	三四
二〇	川柳點		三五
二一	法隆寺	高濱虚子	三五
二二	狩野芳崖	岡倉覺三	三六
二三	日本繪畫の特性	和辻哲郎	三六



國語 卷七

一 結晶の力

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹
詩人 小説家
長野縣の人
明治五年生
隅田川
荒川の下流
東京市内を流
れて東京灣に
注ぐ

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。水にはまつたく経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場へ通ふうちには、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更に又一夏も泳いでみたら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃には、よくも分からなかつた水瀬の速い遅いも分かつて來たし、眞水と潮流のまざりあつたあの川の中の冷たい

所と温かい所とも分かつて、來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳手の様子を、泳ぎながらに見ることも出来るやうになつた。板子なしには溺れるのほかなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を往復することが出来た。私は普通の泳手が行けるところまでは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なか／＼容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人を見たりした時などは、まつたく感歎してまつた。

文章の道にも、誰にでも到著し得られるやうな境地があるに相違ない。そして、根氣さへあれば、そこまで行くことは決してむづかしくないに相違ない。

信州
信濃國
現長野縣
同縣北佐久郡
小諸町

信州
信濃國
現長野縣
同縣北佐久郡
小諸町

信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛け、たゞ當りさへすればいい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫ぬくことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢で煩はしい「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が、私達の矢場に來た。その老人が、先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫ぬくことが出来ないやうな場合でも、一手揃て同じ場所に行くやうになつた。

これは文章の道にも當嵌めてみる事が出来る。唯好い文章をのみ作らうと思つて、焦心するのは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ「自己」から正してかゝらなければならぬ。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よく鋤をかついで行つて土を耕してみた。私は先づ荒れた畠の地面を掘りおこすことから始めた。土を砕いた。小石を選り分けた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな、植ゑ易いものから作つてみた。その畠には大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類をも植ゑてみた。草をとりに行き、さくをきりに行つた。

マ
ソ
リ

馬鈴薯の花が白く盛りの頃に出て、試みに土の中を探つてみると、はや丸いやつが、幾つもの根元の方から出て來た。豌豆の蔓が長く伸びて、人の脊よりも高く絡みついた畠の中には、嫩い莢を摘む、鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手でよく整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを今でもよく思ひ出すことが出来る。

われ／＼の文章の手本とすべきものがなほどわれ／＼の周圍にあつても、それを悟らないことにはしかたがない。

それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは「悟る」といふことのはじめだ。

浅草の新片町に住んで居た頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私はあの界限を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは無暗に手足を動かして、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し手許へ引きして骨折つてみた。それでも、舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突つきたらないやうに、——さう思つて漕いで行く楽しみなども、それ

浅草の新片町
現東京市浅草
區柳橋通附近
浅草橋
神田川に架せ
られた橋
浅草・日本橋
兩區の界に在
る
兩國橋
隅田川に架せ
られた橋
日本橋・本所
兩區の界に在
る

から起つて來た。それから船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、力の省略がある、簡素の美がある。

文章の道に於ても、無暗に筆を弄することが、決して自己の眞の「表白」とはならない。眞によい文章には、眞によい「結晶」の力がある。

(飯倉だより)

島木赤彦
本名久保田俊彦

歌人

長野縣の人
大正十五年歿
年五十一

アキラキ
現存 萬葉集
土井先生

二 歌の響

島木赤彦

短歌に於ける表現は單に言語の意味の上に現れて、それで足りるとすることは出来ません。表現しようとする感動が各語の響やそれを聯ねた全體の節奏の上に現れて、始めて一首の生命を持ち得るのであります。歌の言語の響節奏、これを歌の調べ調子若しくは聲調格調といひます。

我々の感動は、伸びくと働く場合、ゆるくと働く場合、切迫して働く場合、沈潜して働く場合といふやうに、箇々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が宛らに歌の言語の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒軽する

巨勢山のつらくはき

つらくに見つ

おもひの巨勢の五層野

つらき

(九月作)

柿本人麿歌集

柿本朝臣人麿

之歌集

萬葉集中に名

の見える歌集

今は傳はらな

弓月が嶽

現奈良縣磯城

郡纏向村に在

る谷向山の一

峯

萬葉集

二十卷

奈良朝時代に

成つた歌集

撰者未詳

大伴家持

撰

ところのないほど、短歌表現上の重要な要素になるのでありまして、古來よりの秀作は、皆歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つほどの力となつてゐるのであります。

例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に

雲立ちわたる 萬葉集卷七

の歌について言ひましても、山川の瀬の鳴るなべにと一氣に進んで第四句を呼び起すところに生動の趣を生ずるのであります。この「なべ」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて、山川の景情生動の趣をなしてゐる勢は、之を他の如何なる句法を以てしても換へることの出来ない

ものでありませう。これは勿論、なべに「の持つ意味より来る力もあるのですが響から来る力と、その響の全體の節奏に及ぶ影響が大きいのであります。殊に、第一・二句に於ける「の」疊用を受けて、「鳴るなべに」と押進んで行く勢を想ふべきであります。第四・五句は、之に對して更に非常の力を以て据わつてゐるのであります。金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も、主として調子の上に現れてゐるのであります。第五句二五音が、主として力の中心となつてゐます。試みに第五句を「雲ぞ立つなる」白雲立つもなどの三四音四三音としたらどうでありませう。歌の力が滅茶々に碎けてしまふでありませう。歌の命が内容や材料になくて、調子にあることが分かります。この歌は實

金剛力士、
（金剛）を指して、
秋の山を指して、
雲の支えを指して、
（？）

人麿

柿本人麿

藤原朝の歌人

吉野

吉野山

現奈良縣吉野

郡の南部に横

たばる大峯山

脈の一支脈

象山

現奈良縣吉野

郡中莊村に在

る

山部赤人

奈良朝初期の

歌人

に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が、徹底して一首の調子に現れてゐるのであります。かやうな歌によつて歌の調子を會得することは、爲になると思ひます。

これは多分人麿の歌でありませう。

み吉野の象山のまの木ぬれにはここだもさわ

ぐ鳥の聲かも 萬葉集卷六

これは山部赤人の歌であります。「山のまは山の際」、「木ぬれは木の末」、「ここだは許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀬の」歌によく肖てゐるのみならず、「み吉野の象山のまのと」の「の」を疊用して初句を起してゐる手法までもよく肖てゐるのであります。第三句以下に至つて、全く前者と異なる感動を現

東、野に陽を
 立つやえてか
 見、小は月後
 ぬ
 梅の梅、梅
 鳥、鳥が鳴くは
 心、心は古
 思、思ふ
 小、小の葉は
 別、別れぬは
 赤、赤人の

すに至つてゐます。これは、前の人麿の歌の、第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、み吉野の象山のまの木ぬれにはと呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押進めてゐるからでありまして、ここだもさわぐ鳥の聲かもの四三音三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音二五音の諧調とおのづから別趣の勢をなしてゐます。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つてゐます。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した靜肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つてゐます。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は個性の異なるがまゝに異なつてゐるのでありまして、それが自然に歌の調子に現れるのであります。尙、この赤人の歌

吉野山の離宮
 現中莊村宮瀧
 附近に在つた

で、上句を受ける第四五句に重々しい響を持つた詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所に誘つて行く力になつてゐることを注意すべきであらうと思ひます。
 ぬば玉の夜の更けぬれば久木生ふる清き川原
 に千鳥しば鳴く 萬葉集卷六
 これも赤人の歌で、前の歌と同時に吉野山の離宮で作つた歌でありまして、靜肅な感動と、その感動の現れが、前の歌と通じてゐるところがあります。「ぬば玉の夜の更けぬれば」と押して行く勢が既に異常でありまして、澄みきつた世界へ誘ひこまれる心地がいたします。それを三句から五句まで連続した句法でうけて、最後に「千鳥しば鳴く」と引緊つた音を以て結んでゐます。暢達の姿があつて、軽い滑りになりません。各

五葉調
七五調
七五七
七五七
七五七
七五七

音の含む響が度しく緊つてゐるためでありませう。この歌は前の歌とともに、赤人の傑作といふべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり

天の香具山 萬葉集卷一

持統天皇の御歌として知られてゐます。第二句と第四句とで切れてゐるために、調子が落著いて、初夏の心持が現れてゐます。第五句の名詞止も、この場合よく据わつて、動かさない重みを持つてゐます。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句できまります。第五句だけでは無論きまりませんが、少くも、第五句の調子が軽ければ、歌全體を軽くしてしまふやうであります。これは前に挙げた歌例について見ても分

天の香具山
現磯城郡香久山村に在る
大和三山の一
持統天皇
第四十一代

かります。萬葉集には字餘り句が多いのでありますが、それは大抵第五句にあるやうであります。それも、第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして 萬葉集卷三

湯原王の御歌であります。第一句からすらくと連続した句法を第四句で一旦踏み切つてゐるために、緊りと勢が生じ、更に山かげにしてといふ生動の句を据ゑて、この句一首全體に反響するほどの力になつてゐます。感歎に値する作でありませう。

今一つ、源實朝の歌を挙げます。

夏實の川
現中莊村菜摘附近を流れる
吉野川の一部
湯原王
天智天皇の皇子
孫
志貴皇子の御子
奈良朝の歌人
源實朝
鎌倉幕府第三代の將軍
歌人
承久元年（一一八七）歿
年二十八

大海の磯もどろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも

波の鞆と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句「よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏み切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そしてそれを現した歌の姿と、如何によく一致してゐるかを知ることが出来ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を説きましたが、心の相が人々によつて異なり、人の心も様々に動くのでありますから、その動きの状が如何にして歌の調子に現れるかといふこ

とは、到底説き盡くせる筈がありません。唯、それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現れてをらねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔らかきものは柔らかきに緊張してをり、強きものは強きに緊張してをり、暢びやかなるは暢びやかに緊張してをらねばならぬのであります。その緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集でありまして、さやうな歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主觀から生まれることは贅言に及びません。

(赤彦全集)

三松風

西行

俗名佐藤義清

歌人

元左兵衛尉

建久元年(一

八五〇)歿

年七十三

西

行

吉野山やがて出てじと思ふ身を花散りなばと
人や待つらむ

松風の音あはれなる山里にさびしさそふる日
ぐらしのこゑ

廊下は下にて春夜を
よめる

二一八

道々の清水流るく柳陰

暫しとぞそよ

止まりつ小

つ長きすしとすし

水の音はさびしき庵の友なれや峯の嵐のたえ

またえまに

訪ふ人も思ひたえたる山里のさびしさなくば

住みうからまし

寂しさにたへたる人のまたもあれな庵ならべ

む冬の山里

ひとりすむかた山かげの友なれや嵐にはるる

冬の夜の月

山家集

源實朝

源實朝
鎌倉幕府第三
代の將軍
右大臣
歌人
承久元年（一
八七九）歿
年二十八
箱根路
箱根山（現神
奈川・静岡兩
縣に跨がる）
から伊豆へ通
ずる山路
伊豆
伊豆國
現静岡縣の内
沖の小島
初島
現同縣熱海市
に所屬

さ蕨の萌え出づる春になりぬれば野邊の霞も
たなびきにけり
己然にばかてとらききこふ
未だ形はばいづこも思ふ

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島
に波の寄る見ゆ

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴
きて秋は來にけり

木の葉ちり秋も暮れにし片岡の寂しき杜に冬
は來にけり

ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀れな
るかなや親の子を思ふ

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨
やめたまへ

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心
わがあらめや

北村透谷
名は門太郎
詩人 評論家
神奈川縣の人
明治二十七年
歿 年二十七

四 萬物の聲と詩人

北村透谷

萬物自ら聲あり。聲あれば又自ら樂調あり。蚯蚓は動物の中に於て、醜にして且拙なるものなり。然れども夜深深窓に當りてその斷續の音を聽く時は、人をして造化の生物を理する妙機の驚くべきものあるを悟らしむ。

自然は常變なり、須臾も停滯あることなし。自然は常動なり、須臾も寧靜あることなし。自然は常爲なり、須臾も無爲あることなし。その變、その動、その爲、各一箇の定法の上に立ち、更に又根本の法ありて之を支配するを見る。淵に臨みて靜かに水流の動靜を察するに、往きたるものは必ず反り、反れるものは必ず往く。若きものは必ず老い、生あるものは必ず死

す。苦あるものに樂あり、樂あるものに苦あり。造化は偏頗にして偏頗にあらず、私にして私にあらず。差別の底に無差別あり、不平等の懷に平等あり。然り、造化の妙機は秘してその最奥にあるなり。人間の最奥之を人間の空といひ、造化の最奥之を造化の靈といふ。人間の空、造化の靈、そこに大平等の理あるなり。そこに至妙の調和あるなり。而してこの理、この調和より、萬物皆一種の聲を放ちつゝあるにあらずや。形の醜美を見て其の醜美を決するは未だ美を判ずるの最後にあらず。外極めて醜にして、内極めて美なるものあり。外極めて美にして、内極めて醜なるものあり。醜と美とを判かつは必ずしも其の形體に關るにあらざるなり。形體にあらはれたる醜美を斷ずるは獨り眼眸のみ。眼眸は未だ以て

醜美を斷ずる唯一の判官となすべきにあらず。鼓膜また關つて力あるべきものなり。否、否、眼眸も鼓膜も未だ以て眞に醜美を判すべきものにあらざるなり。凡そ形の美は心の美より出づ。形は心の現象のみ。形を知るものは形なり、心を視るものは心ならざるべからず。造化は奇しき力を以て、萬物に自らなる聲を發せしむ。萬物の聲之を以てその情を語らしめ、之を以てその意を言はしむ。しかも無絃の大琴懸けて宇宙の中心にあり。萬物の情、萬物の心、この大琴に觸れざるはなく、この大琴の音ならざるはなし。萬物の情、萬物の心、各、その軌を異にするが如しと雖も、畢竟琴の音色の異なるが如くに異なるのみ、その大琴の音たるに於ては等しきなり。箇々の悲苦、悅樂は要するに、この大琴の一部分たるのみ。悲しき時は

獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、總べてのものの悲しむなり。喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども、然るにあらず、總べてのものの喜ぶなり。自然は萬物に私情あるを許さず、私情をして、大法の外に縦なる運行をなさしむることあるなし。私情の喜は故なきの喜なり、私情の悲しみは故なきの悲しみなり。彼の大琴に相涉るところなければ、根なき萍フナギの海に漂ふに等しきのみ。情及び心、個々特立して而して個々その中心を以て、宇宙の大琴の中心に聯れり。海も陸も、山も水も、ひとしく我が心の一部分にして、我も亦彼の一部なり。彼も我も何物かの一部分にして歸するところ即ち一なり。四節の更迭は、少老盛衰の理と果して幾程の差違かあらん。樹葉の凋落は老衰の終末と如何の異別かあらん。花笑ふ時我

も笑ひ、花落つる時我も落つ。實熟する時我も熟し、實墜する時我も墜つ。彼を支配する引力の法は即ち我を支配する引力の法なり。彼を支配する生命の法は即ち我を支配する生命の法なり。彼と我との間に甚だしき相違あることなし。法は一なり。法に順ふものも亦一なり。法と法に順ふものとの關係も亦一なり。高きも低きも、濁れるも清きも、然りこの一致あり。この一致を觀じて後に多くの不一致を觀ず、是詩人なり。この大平等大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、是詩人なり。天地を取つて一の美術となすは之を以てなり。あらゆる聲を取つて音樂となすは之を以てなり。詩人の前には總べての物、總べての事、悉く是詩なるは之を以てなり。多くの不一致中の一不一致を取り、

多くの不平等中の一不平等を取り、多くの差別中の一差別を取り、而して之に戀著するを知つて、彼の大一、大平等、大無差別に悟入する能はざるものは、未だ以て天地の一大詩たる所以を知らざるものなり。難いかな、詩人の業や。

美術は人間に臨める大感化力なるに於ては宗教と異なるところなし。たゞラスキンの言へる如く、美術は道義を圓滿にするの力を有すれども、宗教の如く道義を創造すること能はざるのみ。宗教の天啓たる如く、美術も亦一種の天啓なり。宗教の高尙なる使命を帯びたる如く、美術も亦高尙なる使命を帯びたり。人間性はその唯一の目的なり。無より有を出すにあらざり。有を取りて之を完うするものなり。最も劣等なる動物より最も高等なる動物を造るにあらざり。最も高等

ラスキン
1819—1900
イギリスの思想家・評論家

なる動物をしてその高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり。宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷つくるあれば必ずその責罰としての不調和あり。是即ち調和の中に之と戦へる不調和の要素ある所以なり。東に吹く風は再び西に吹き來り、氣燥くところに雲自ら簇る。雲は雨となり、雨は雲となる。是等のもの一として宇宙の大調和の中に動く不調和にあらざるはなし。萬づの事皆空にして法獨り實なり。法實にして法に違ふところの萬物皆實なるを得べし。自然は常變にして不變、常動にして不動、常爲にして無爲、法の眼に於て然り。

一國民の美術は到底その倫理の表象なり。野卑なる國民は野卑なる美術に甘んじ、高尚なる國民は高尚なる美術を求

む。勇敢なる國民に勇武の物語出て、淫逸なる國民に淫逸なる史乘あり。畢竟するに、萬物その自らなる聲をなして、而して美術はその聲を具體にしたるものに過ぎざれば、形は如何にありとも、その聲の主なる心にして野卑ならば、美術も野卑ならざらんと欲するも得べからざるは至當の理なり。宇宙の中心に無絃の大琴あり、總べての詩人はその傍に來りて、己が代表する民族の爲に、己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。人間性の各種の變狀は之によりて發露せらる。眞實にして虚飾なき人生の説明者は、この琴絃の下にありて、明々地にその至情を吐く。その聲の悲しき、その聲の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。

詩人は己の爲に生くるにあらず、己が圍まれたる神祕の爲

に生くるなり。その聲は己の聲にあらず、己を圍める小天地の聲なり。彼は無言にして常に語り、無爲にして常に爲せり。彼を圍める小天地は、悲しみをも悦をも、彼を通じて發露す。彼は神聖なる蓄音器なり、萬物自然の聲、彼に蓄へられ、彼によりて世に啓示せらる。秋の蟲はその悲しみを詩人に傳へ、空の鳥はその自由を詩人に告ぐ。故に詩人は牢獄を辭せず、詩人は碧空を遠しとせず。天地は一の美術なり、詩人なくんば誰か能くこの妙機を聞いて之を人間に語らんや。

(北村透谷集)

五 望郷五月歌

佐藤 春夫

佐藤春夫
詩人 小説家
和歌山縣の人
明治二十五年
生

木の國
紀伊國
現和歌山・三
重兩縣の内
牟婁
和歌山縣東・
西牟婁郡及び
三重縣南・北
牟婁郡の地

塵まみれなる街路樹に
哀れなる五月來にけり。
石だたみ都大路を歩みつつ、
戀ひしきや何ぞわが古里。
あさもよし木の國の
牟婁の海山、
夏みかんだわわに實のり、
橘の花さくなべに
とよもして啼くほととぎす。

心してな散らしそかのよき花を。

朝霧か若かりし日の

わが夢ぞ

そこに狭霧らふ

朝雲か望郷の

わが心

そこにいさよふ。

空青し山青し海青し。

日はかがやかに

南國の五月晴こそゆたかなれ。

心も軽くうれしきに

海うみの原見はるかすとして

のぼり行く山邊の徑は、

杉檜樟の芽吹の

花よりもいみじく匂ひ、

かぐはしき木の香薫じぬ。

のぼり行く徑いくまがり、

しづかにも昇る煙の

見まがふや香爐の煙、

山賤が吸ひのこしたる

鄙ぶりの山の煙草の

椿の葉焦げて落ちたり。

古への帝王たちも通はせし
 尾の上の徑は果を無み
 ただつれづれに
 通ふべききはにあらねば、
 目を上げてただに望みて
 いそのかみふるき昔をしのびつつ
 そぞろにも山を降りぬ。
 歌まくら塵の世をはなれ小島に
 立ち騒ぐ波もや見むと
 迎り行く荒磯石原、
 丹塗舟影濃きあたり

丹塗舟影濃きあたり
 丹塗舟影濃きあたり
 丹塗舟影濃きあたり

浦の舟中
 舟重なりいけ鬼(云)
 舟重なりいけ鬼(云)
 舟重なりいけ鬼(云)

(下葉末葉巻四)

〔出所〕
 春夫詩鈔

若者の憩へるあらば、
 海の幸鯨捕る船の話も聞くべかり。
 且は聴け、
 浦の濱木綿百重なす松の下かけ。
 いざさらば、
 心ゆく今日のかたみに、
 荒海の八重の潮路を運ばれて
 流れよる千種百種
 貝がらの數を蒐めて歌にそへ
 贈らばや都の子等に。

六 舞へ舞へ蝸牛

舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば 馬の子や
牛の子に蹴キゑさせてむ 踏み破らせてむ ま
ことに美しく舞うたらば 花の園まで遊ばせ
む

松の木かげに立ちよりて 岩もる水をむすぶ
間に 扇の風も忘れられて 夏なき年とぞ思ひ
ぬる

池の涼しき汀には 夏のかげこそなかりけれ
こだかき松を吹く風の 聲も秋とぞ聞えぬる
遊をせむとや生まれけむ たはぶれせむとや
生まれけむ 遊ぶ子供の聲きけば 我が身さ
へこそゆるがるれ

佛は常にいませども 現ならぬぞあはれなる

人の音せぬ曉に ほんかに夢に見え給ふ

(出所)
梁塵秘抄
二十卷
平安朝末期に
成った歌謡集
後白河法皇御
撰

七 源氏物語論

本居宣長

本居宣長
國學者
伊勢國(三重縣)の人
享和元年(二四六一)歿
源氏物語
五十四帖
紫式部作
日本紀
三十卷
繪合
源氏物語の第十七卷
竹取物語
二卷
宇津保
二十卷
延喜
醍醐天皇の御代の年號(一五六一—一五八二)

中むかしのほど物語といひて一くさの書あり。物語とは今の世にはなしといふことにて、すなはち昔話なり。日本紀に「談」といふ文字をぞ「もの」がたりと訓みたる。そを書に名づけて作れることは「繪合」の巻に、物語のいできはじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせてとあれば、此の竹取やはじめなりけむ。其の物語、誰が何時の代に作れりとはさだかには知られねども、いたくふるき物とも見え、延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる。其の外、かのたぐひなる古物語ども、此の源氏のよりさきにも、かず／＼多くありしと聞えて、其の名どもあまた聞えたれど、後の世には傳はらぬぞ多かめ

榮華物語
世繼物語とも
いふ
四十卷
煙の後
榮華物語の第三十七卷

る。又同じころ、それより後の物も多くして、今の世にも、これかれとあまたのこれり。榮華物語の「煙の後」の巻に、物語合はせとて、今あたらしく作りて、左右かたわきて、二十人合はせなとせさせ給ひて、いとをかしかりけりといへるを見れば、其のころも多く作りたりしなり。ゆゑに「物語」制作
さて、もろ／＼の物語のさま、おの／＼少しづつかはりて、さまざまなれども、何れも昔の世にありし事を語る由にて、あるはいさゝかかたち有りし事をよりどころにして、作りかへても書きあるは、其の名をかくしもし、かへもして書きあるは、みながら作りもし、又稀には有りしことを其のまゝに書けるもありて、様々なる中に、まづ多くは作りたるものなり。さて、そはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞと

いふに、大かた物語は世の中にありとあるよき事あしき事めづらしき事をかしき事おもしろき事あはれなる事などのさまさまを書きあらはして其のさまを繪にもかきまじへなどしてつれづれなるほどのもてあそびにし、又は心のむすぼほれて物おもしろきをりなどのなくさめにもし世の中のあるやうをも心得てもものあはれをもしるものなり。
こゝらの物語書どもの中に源氏物語は殊にすぐれてめでたき物にして大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなる古物語どもは何事もさしも深く心をいれて書けりとしも見えず。たゞ一わたりにてあるはめづらかに興ある事をむねとしおどろしきさまの事多くなどして、何れも何れも物のあはれなるすぢなどはさしもこまやかに深

大かた一打曲
まこと
三三
三三
三三
三三
三三
三三
三三

くはあらず。又これより後の物語どもは狭衣などは何事もはら此の物語のさまをならひて心をいれたりとは見ゆるものからこよなく劣れり。其の外もみな異なることなし。たゞ此の物語ぞこよなくて殊に深くよろづに心をいれて書ける物にしてすべての文詞のめでたきことは更にいはず世にふる人のたゞすまひ春夏秋冬をりノの空のけしき本草のありさまなどすべて書きさまめてたき中にも男女其の人々のけはひ心ば世をおのゝことゝに書き分けてほめたるさまなども皆其の人ノのけはひ心ばへにしたがひてひとやうならずよく分かれてうつゝの人にあひ見る如くおしはかるゝなどおぼろげの筆のかけても及ぶべきさまにあらず。

源氏物語の特色
源氏物語の特色
源氏物語の特色

さて又よろづよりもめでたきことはまづからぶみなどは、
世にすぐれたりといふも、世の人の事にふれて思ふ心のあり
さまを書けることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく
浅きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書け
る如く、ひとかたにつきぎりなるものにはあらず、深く思ひ
しめる事にあたりては、とやかくやと、くだくしくめ、しく
みだれあひてさだまりがたく、さまざまのくま多かるものな
るを、此の物語には、さるくだくしくまくままでのこるか
たなく、いとくはしくこまかに書きあらはしたること、曇な
き鏡にうつしてむかひたらむが如くにて、大かた人の情のあ
るやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさき
にも、たぐふべき書はあらずとぞおぼゆる。

源氏物語玉の小
櫛 九卷
源氏物語の註
釋書
寛政十一年
(二四五九)刊

又すべて卷々の中に、めづらしくおどろしくめさむる
やうの事は、さくなく、はじめよりをはりまで、たゞ世の
つねのなだらかなる事の同じやうなるすぢをのみいひて、い
と長き書なれども、讀むにうるさくおぼゆることなく、倦むこ
とはなくて、たゞつゞきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おの
れ教子どものためには、やくより、此の物語を讀みときてきか
することあまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばか
り長からぬだに、説くに倦む心もまじるを、これはさしも長き
書にて、年月をわたれども、いさゝかも倦むこゝろいで、こず、度
毎にはじめて讀みたらむこゝちして、めづらしくをかしくの
みおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどは知られて、かへす
がへすめでたくなむ。

(源氏物語玉の小櫛)

八 平重盛

平重盛 清盛の長子
 内大臣・左近衛大將
 治承三年(一八三九)歿
 年四十二
 太政入道
 平清盛
 新大納言成親卿
 藤原成親
 嚴島大明神
 市杵島姫命
 現廣島縣佐伯郡嚴島町に在る官幣中社嚴島神社の祭神
 貞能
 平貞能
 保元
 保元の亂
 平右馬助
 平忠正
 清盛の叔父
 新院
 崇徳上皇
 第七十五代

太政入道は、新大納言成親卿以下、御近習の人々數多縛め置いても、猶心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲威の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常に枕を放たず立てられたりしを脇挟み、中門の廊にぞ出でられたる。その氣色大方ゆゝしく、ぞ見えし。貞能を召す。

筑後守貞能は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、貞能、この事いかゞ思ふ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參

一宮
 重仁親王
 崇徳天皇の第一皇子
 故刑部卿殿
 平忠盛
 清盛の父
 故院
 鳥羽法皇
 第七十四代
 平治の亂
 平治元年
 一八一九年
 經宗
 藤原經宗
 左大臣
 當時權大納言
 惟方
 藤原惟方
 檢非違使別當
 西光
 俗名藤原師光
 後白河法皇の寵臣



平重盛

りにき。一宮の御事は故刑部卿殿の養君にてましまししかば、傍見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任かせて、御方にて先をかけたりにき。

これ一つの奉公。次に平治の亂の時、入道命惜しうては叶ふまじかりし間、身を捨てて凶徒を追ひ落とし、經宗惟方を召し縛めしに至るまで、既に君の御爲に命を失はんとする事度々に及ぶ。たとひ人何と申すとも、七代まではこの一門をばいかでか捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用の徒者、西光といふ下賤の不當人めが申すことにつかせ給

百箇けしり
相撲や
と物持のな
と

法皇
後白河法皇
第七十七代
鳥羽の北殿
現京都市伏見
區竹田・下鳥
羽兩町の地に
在った鳥羽離
宮の北殿
主馬判官盛國
平盛國
小松殿
現京都市東山
區内、東山の
麓に在った重
盛の邸
法住寺殿
現東山區内に
在った後白河
法皇の御所

ひて、この一門を滅すべき由、御結構こそ遺恨の次第なれ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、如何に悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移し奉るか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の輩、矢をも一つ射んずらん。侍どもにその用意せよと觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ、著背長取り出せとぞ宣ひける。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて、世は既にかう候と申しければ、大臣聞きもあへず、あゝはや成親卿が首刎ねられたるなと宣へば、さは候はねども、入道殿既に御著背長召され候。侍共も皆打立つて、法住寺殿へ寄せんと出て立ち候。法

鎮西九州

禪門 清盛

西八條
西八條殿
現京都市下京
區内、東寺の
北に在った清
盛の邸

小松殿
重盛

皇をば鳥羽殿へ御幸とは聞えさせ給へども、内々は鎮西の方へ遷し奉るべしとこそ承り候へと申せば、大臣、いかでかざる事あるべきと思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともあるらんとて、車を飛ばして西八條へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給へば、入道腹巻を著給ふ上は、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に、思ひ思ひの鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領衛府諸司などは、縁に居こぼれ、庭にもひしと竝み居たり。旗竿ども引きそばめ、引きそばめ、馬の腹帯をかため、兜の緒をしめ、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に、大紋の指貫のそばとつて、さやめき入り給へば、殊の

内府
重盛

宗盛卿
平宗盛
清盛の第二子
内大臣
當時權中納言
右近衛大將
文治元年(一
八四五)歿
年三十九

外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ内府が、例の世をへうするやうに

振舞ふものかな。大いに諫めばやと思はれけるが、さすが子

ながら、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂

らず禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向か

はんこと、おもはゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引

立て、素絹白絹の衣を腹巻の上にあわて著に著給ひたりけるが、胸

板の金物の少しはづれて見えけるを隠さんと、頻りに衣の胸

を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は、舍弟宗盛卿の座上に

著き給ふ。入道も宣ひ出さず、大臣も申し出さるゝこともな

し。

やゝあつて入道宣ひけるは、成親卿が謀叛は事の數にもあ

らず。一向法皇の御結構にてありけるぞや。世を鎮めん程、

法皇をば鳥羽の北殿へ遷し奉るか、然らずば、これへまれ、御幸

をなし參らせんと思ふはいかにと宣へば、大臣、聞きもあへ給

はず、はらゝとぞ泣かれける。入道、如何にとあきれ給

ふ。大臣涙をおさへて申されけるは、この仰せ承り候に、御運

ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず

悪事を思ひ立ち候なり。又御有様更に現とも覺え候はず。

さすがわが朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御

子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌り給ひしよ

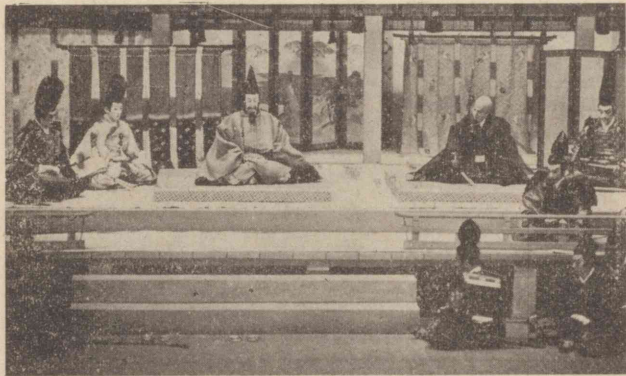
り以降、太政大臣の官に至る人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背く

にあらずや。就中、御出家の御身なり。法衣を脱ぎ捨てて、忽

ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましきこと、内には破戒無慚

天兒屋根命
中臣・藤原兩
氏の祖神

普天の下云々
 普天之下、莫
 非王土、率土
 之濱、莫非王
 臣。 (詩經)
 穎川の水に云々
 支那堯代の高
 士許由の故事
 堯讓天下於
 許由、許由不
 受而逃走、
 堯又召爲九
 州長。由不欲
 聞之、洗耳
 於潁水濱。
 (高士傳)
 首陽山に云々
 支那周代の義
 士伯夷、叔齊
 の故事
 武王已平殷
 亂天下宗周、
 而伯夷叔齊恥
 之、義不食
 周粟、隱於首
 陽山、采薇而
 食之。
 (史記)



(面臺舞伎舞歌)言諫盛重

の罪を招くのみならず、外には又仁義禮智信の法にも背き候
 ひなんず。 旁、恐ある申し事にて候
 へども、心の底に旨趣を殘すべきに
 もあらず。
 「先づ世に四恩候。 天地の恩、國王
 の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。
 その中に最も重きは朝恩なり。 普
 天の下玉地にあらずといふことな
 し。 されば、かの穎川の水に耳を洗
 ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命
 背き難き禮儀をば存知すとこそ承
 れ。 如何に況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさ

聖德太子
 廢戶豐聰耳皇
 子
 用明天皇の皇
 子
 推古天皇の攝
 政皇太子
 推古天皇三十
 年(一一八二)
 薨 御年四十
 九
 十七箇條の御憲
 法
 推古天皇十二
 年御制定

せ給ふ。 所謂、重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至
 る。 加之、國郡半ば過ぎて一門の所領となり、田園悉く一家の
 進止たり。 これ稀代の朝恩にあらずや。 今これ等の莫大の
 御恩を思し召し忘れて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給
 はんこと、天照大神正八幡宮の神慮にも背き候ひなんず。 日
 本はこれ神國なり。 神は非禮を受け給はず。 然るを君の思
 し召し立つ所道理半ばなきにあらず。 中にもこの一門は、代
 代の朝敵を平げて四海の逆浪を鎮むることは、無雙の忠なれ
 ども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。 聖德太
 子十七箇條の御憲法に、人みな心あり、心おのゝ執あり。 か
 れを是し、われを非し、われを是し、かれを非す。 是非の理、誰か
 よく定むべき。 相共に賢愚なり、環の如くにして端なし。 こ

こを以て假令人怒るといふとも却つてわが咎を恐れよ」とこ
 ぞ見えて候へ。然れども御運盡きざるによつて御謀叛既に
 露れぬ。その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召し置かれぬる
 上は假令君如何なる不思議を思し召し立たせ給ふとも何の
 恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は退きて事の由を陳
 じ申させ給ひて君の御爲には彌奉公の忠勤をつくし民の爲
 には益撫育の哀憐を致させ給はば神明の加護に預り佛陀の
 冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば君も思し召し直
 すことなどか候はざるべき。

これは君の御理にて候へば叶はざらんまでも院の御所法
 住寺殿を守護し參らせ候べし。その故は重盛敍爵より今大
 臣の大將に至るまで併しながら君の御恩ならずといふこと

千顆萬顆の云々
 豎日豎風高
 低千顆萬顆之
 玉。染校染浪
 表裏一入再入
 之紅。
 (和漢朗詠集)

迷廬
 蘇迷廬
 須彌山

なし。その恩の重きことを思へば千顆萬顆の玉にも越えそ
 の恩の深き色を按ずれば一入再入の紅にも猶過ぎたらん。
 然れば院中へ參り籠り候べし。その儀にて候はば重盛が身
 に代り命に代らんと契りたる侍共少々候らん。これ等を召
 し具して院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はばさすが以
 ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。

悲しきかな君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば迷廬八
 萬の巔よりなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきか
 な不孝の罪を遁れんとすれば君の御爲に既に不忠の逆臣と
 なりぬべし。進退これ谷れり。是非如何にも辨へがたし。
 申し受くる所詮は唯重盛が首を召され候へ。院中をも守護
 しまゐらすべからず。院參の御供をも仕るべからず。富貴

富貴の家云々
常觀富貴之家
祿位重疊
猶再實之木
其根必傷
(後漢書)

といひ、榮花といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。「富貴の家には、祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ずいたむ」と見えて候。心細くこそ候へ。何時までか命生きて、亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目にあひ候重盛が果報の程こそつたなく候へ。只今侍一人に仰せつけられて、御坪の内へ引き出されて、重盛が首の刎ねられんずることは、易い程の御事にてこそ候へ。これ各聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりに涙を流し、かきくどかれければ、一門の人々心あるも心なきも皆袖をぞぬらされける。

太政入道も、頼み切つたる内府はかやうに宣ふ。力もなげにて「いや〜これまでは思ひもよりさうず。悪黨共の申す

事に君のつかせ給ひて、僻事などや出で來んずらんと思ふばかりにてこそ候へ」と宣へば、大臣、假令如何なる僻事出で來候とも、君をば何とかし參らせ給ふべきとて、つい立つて中門に出で、侍共に仰せられけるは、只今重盛が申しつる事をば汝等承らずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事ども申し鎮めんと存じつれども、餘りにひたさわぎに見えつる間、歸りつるなり。院參の御供において、重盛が首の召されんを見て仕れ。さらば人參れとて、小松殿へぞ歸られける。

(平家物語)

平家物語
十二卷(流布本)
鎌倉時代初期
に成つた軍記
物語
作者未詳

九 平家の都落

小松三位中將維
盛卿
平維盛
重盛の長子
右近衛中將
藏人頭
大臣殿
平宗盛

平家は小松三位中將維盛卿の外は、大臣殿以下妻子を具せられけれども、次様の人々はさのみ引きしろふにも及ばねば、後會其の期を知らず、皆打捨ててぞ落ち行きける。人は何れの日、何れの時、必ず立歸るべしと其の期を定め置くだにも、別れは悲しきならひぞかし。況や是は今日を最後、只今限りの事なれば、行くも留るも、互に袖をぞ濕しける。相傳譜代の好年比日比の重恩、いかでか忘るべきなれば、老いたるも若きも、後のみ顧みて、前へは進みもやらざりけり。

或は磯邊の波枕、八重の潮路に日を暮し、或は遠きを分け、嶮しきを凌ぎつゝ、駒に鞭打つ人もあり、舟に棹さす者もあり、思

此地鐵鬼道、高き道、修羅道、人間道、天上道

ひ思ひ心々にぞ落ち行きける。

福原 現神戸市の内
清盛の別荘地
治承四年(一八四〇)假りに都を遷され

積善の餘慶云々
積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有余殃。(易經)

一樹の蔭に云々
或處一村、猶一樹下、汲一河流、皆是先世結縁。(説法明眼論)

福原の舊都に著いて、大臣殿然るべき侍共老少數百人召して仰せられけるは、積善の餘慶家に盡き、積惡の餘殃身に及ぶ故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨てられ參らせて、帝都を出でて旅泊に漂ふ上は、何の憑みがあるべきなれども、一樹の蔭に宿るも、前世の契淺からず、同じ流れを掬ぶも、他生の縁猶深し。如何に況や、汝等は一旦隨ひ附く門客にあらず、累祖相傳の家人なり。或は近親の好、他に異なるもあり、或は重代芳恩、これ深きもあり。家門繁昌の古へは、恩波に依つて私を顧みき。今何ぞ芳恩を酬いざらんや。且は十善帝王、三種神器を帶して渡らせ給へば、如何ならん野の末山の奥までも、行幸の御供仕らんとは思はずやと仰せられければ、老少皆涙を流し

新羅・百濟・高麗
朝鮮半島に在つた王國
契丹
遼
支那北方に在つた王國

故入道相國
平清盛
養和元年（一一八四一）歿
年六十四

て申しけるは、あやしの鳥獸も、恩を報じ徳を酬ゆる心は候なり。況や人倫の身として、いかゞ其の理を存知仕らでは候べき。此の二十餘年の間、妻子を育み、所従を顧み候事も、併しながら君の御恩ならずといふ事なし。就中、弓箭馬上にたづさはる習、二心あるを以て恥とす。然らば、則ち日本の外、新羅、百濟、高麗、契丹、雲の果、海の果までも、行幸の御供仕つて、如何にもなり候はんと、異口同音に申しければ、大臣殿も、頼もしげにぞ見えられける。

福原の舊里に一夜をこそ明かさされけれ。折節秋の初の月は下の弦なり。深更空夜閑かにして、旅寢の床の草枕露も涙も争ひて、たゞ物のみぞ悲しき。いつ歸るべしとも覺えねば、故入道相國の造り置き給へる所々を見給ふに、春は花見の岡

五條の大納言國綱卿

藤原邦綱
養和元年歿
年六十一

主上

安徳天皇
第八十一代

昨日は云々
治承四年の富士川出陣

の御所、秋は月見の濱の御所、泉殿、松陰殿、馬場殿、二階、棧敷殿、雪見御所、萱御所、人々の館ども、五條の大納言國綱卿の承つて造進せられし里内裏、三年が程に荒れ果てて、舊苔徑を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ、垣に蔦茂れり。臺傾いて苔むせり。松風のみや通ふらん。簾絶え、閨露はなり、月影のみぞ差し入りける。

明けぬれば、福原の内裏に火を懸けて、主上を始め奉つて、人皆御船に召す。都を立ちし程こそなけれども、是も名残は惜しかりけり。海士の焼く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄する浪の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりぎりす、すべて目に見耳に觸るゝ事、一として哀を催し、心を傷ましめずといふ事なし。昨日は東關の麓に轡を並べて十萬

はるる、來ぬと
からころもき
つゝなれにし
つましあれば
はるばる來ぬ
るたびをしぞ
思ふ

(伊勢物語)
在原のなにがし
在原業平
歌人

六歌仙の一
元慶四年(一
五四〇)歿

年五十六
隅田川にて云々

名にし負はば
いざこととは
む都鳥わが思
ふ人はありや
なしやと

(伊勢物語)
壽永二年
一八四三年
安徳天皇の御
代

餘騎、今日は西海の浪の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々と
して、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に浮
かべり。極浦の浪を分け、潮に引かれて行く船は、半天の雲に
溯る。日數歴れば、都は既に山川程を隔てて、雲井の餘所にぞ
なりにける。はるる、來ぬと思ふにも、たゞ盡きせぬものは
涙なり。浪の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、彼ならん、
在原のなにがしの隅田川にて言問ひけん、名も睦まじき都鳥
にやと哀れなり。壽永二年七月二十五日に、平家都を落ち果
てぬ。

(平家物語)

芥川龍之介
小説家

東京市の人
昭和二年歿
年三十六

華山
渡邊華山
名は定靜

畫家
幕末の先覺者
天保十二年
(一五〇一)歿
年四十九

馬琴
瀧澤馬琴
名は解

讀本・草雙紙
作者

江戸の人
嘉永元年(二
五〇八)歿
年八十二

八犬傳
南總里見八犬
傳

九十八卷
讀本

二八年

一〇 戲作三昧

芥川龍之介

華山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に、八犬
傳の稿をつぐべく、いつものやうに机に向かつた。先を書き
つゞける前に、昨日書いた所を一通り読み返すのが、彼の昔か
らの習慣である。そこで彼は今日も、細かい行の間へべた一
面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり読み返
した。
すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとびつたりし
ない。字と字との間に不純な雜音が潜んでゐて、それが全體
の調和を到る處で破つてゐる。彼は最初それを、彼の癪が昂
ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の己の心もちが悪いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで書き切つてゐる筈だから。」
さう思つて、彼はもう一度読み返した。が、調子の狂つてゐる事は前と一向變りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうかだらう。」

彼はその前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雑な文句ばかりが、糝然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を読んだ。さうして又その前の前を読んだ。

しかし、讀むに随つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは次第に眼の前に展開して来る。そこには何等の映像をも與へない。彼景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さ

うして又、何等の理路を辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始から書き直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。

この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立——さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦

弓張月
楮説弓張月
三十卷
讀本
南柯夢
三七全傳南柯
夢
六卷
讀本
端溪
現中華民國廣
東省高要縣に
在る
硯石の名産地
であつた

に、久しい以前から親しんでゐる。それらのものを見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな――彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌まはしい不安を禁じることが出来ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり、事によると人竝に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜である事を忘れるものではない。が、それだけに又、同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有

遼東の豕

遼東有豕。生

子白頭。異而

獻之。行至河

東。見群豕皆

白。懷慙還。

(後漢書)

者だつたといふ事を、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふ事を、どうして安々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「さとり」と「あきらめ」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへた儘、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。もしこの時、彼の後の襖がけたましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父様、只今」といふ聲と共に、柔らかな小さな手が彼の頸へ抱きつかなくなつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上

つた。

「お祖父様、只今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では、痾高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から倅の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはり、息をする度に動いてゐる。

宗伯
瀧澤宗伯
馬琴の子
醫師
天保六年（二
四九五）歿
年三十九

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を著た太郎は、突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。——それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日、」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」

馬琴はとう／＼噴き出した。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから？」

「それから——え、と——痾癢を起しちやいけませんつて。」

「おや／＼、それつきりかい。」

「まだあるの。」

「まだ何かあるかい。」

「まだね。いろんな事があるの。」

「どんな事が。」

「え、と——お祖父様はね。今にもつとえらくなりましたからね。」

「えらくなりましたから？」

「ですからね。よくね。辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつともつとようやく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな。今日は御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顔を少し前へ出すやうにして、

「あのね、」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

浅草の観音様
聖觀世音菩薩
現東京市浅草
區浅草公園内
に在る天台宗
の名刹浅草寺
の本尊

かういふと共に、この子供は、家内中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「觀音様がさういつたか。勉強しろ。癩癩を起すな。さう

してもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のもものこの書齋へは、はいつて來ない。ひっそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆が進むのに随つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して來る。經驗上、それ

が何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起す事を知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ……

「あせるな。さうして出来るだけ、深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中には、もうさつきの星を碎いたやうなもの、が川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて来て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には、何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を走りはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゝけた。

筆は自ら勢を生じて走りつゝけた

頭の中の流れは、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて来る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして、緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつゝけろ。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし光の靄に似た流れは、少しもその速力を緩めない。かへつて目まぐるしい飛躍の中にあらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流れの方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ、人生は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか……

その間も茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と、嫁のお路とが、向かひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かしたのであらう。少し離れた所には、尪弱らしい宗伯が、さつきか

ら丸薬をまろめるのに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針に髪のお油をつけながら、不服らしく呟いた。「きつと又お書きもので、夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかういつて、倅と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。お路も黙つて針を運びつづけた。蟋蟀はこゝでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

(芥川龍之介全集)

森鷗外

名は林太郎

文學博士

醫學博士

陸軍軍醫總監

帝室博物館總

長兼圖書頭

島根縣の人

大正十一年歿

年六十一

寒山・拾得

唐代之二隱士

支那の國號

皇紀一二七八

一五六七年

貞觀

唐の太宗の代

の年號(皇紀

一二八七一

一三〇〇)

台州

現中華民國浙

江省の内

長安

現同國陝西省

長安縣

一一 寒山拾得

森 鷗 外

唐の貞觀の頃だと云ふから、西洋は七世紀の初、日本は年號と云ふもののやつと出來かゝつた時である。閻丘胤と云ふ官吏がゐた。

閻が台州の刺史になつて著任してから三日目になつた。長安で北支那の土埃を被つて、濁つた水を飲んでゐた男が、台州に來て中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上機嫌である。それに此の三日の間に、多人數の下役が來て謁見をする、受持々々の事務を形式的に報告する、其の慌しい中に、地方長官の威勢の大きいことを味はつて、意氣揚々としてゐるのである。

天台縣
現浙江省天台
縣
國清寺
支那天台宗の
根本道場
天台山の麓に
在る

碧山詩集

寒山拾得

同丘胤

道翽

閻は前日に下役のものに言つて置いて、今朝は早く起きて、天台縣の國清寺をさして出掛けることにした。これは長安にゐた時から台州に著いたら早速往かうときめてゐたのである。

何の用事があつて國清寺へ往くかと云ふと、それには因縁がある。閻が長安で刺史の任命を受けて、これから任地へ旅立たうとした時、生憎こらへられぬ程の頭痛が起つた。單純なレウマチス性の頭痛ではあつたが、閻は平生から少し神經質であつたので、掛りつけの醫者の藥を飲んででもなか／＼なほらない。これでは旅立の日を延ばさなくてはなるまいかと云つて、妻と相談してゐると、そこへ小女が來て、只今御門の前へ乞食坊主がまゐりまして、御主人にお目に掛りたいと申

しますが、いかゞいたしませう」と云つた。
「ふん坊主か」と云つて閻は暫く考へたが、兎に角逢つて見るから、こゝへ通せと言ひ附けた。

元來閻は科擧に應ずるために、經書を読んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、佛典を讀んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶や道士と云ふものに對しては、何故と云ふこともなく尊敬の念を持つてゐる。自分の會得せぬものに對する、盲目の尊敬とでも云はうか。そこで坊主と聞いて、逢はうと云つたのである。

間もなく這入つて來たのは、一人の脊の高い僧であつた。垢つき弊れた法衣を著て、長く伸びた髪を、眉の上で切つてゐる。目に被さつてゐるさくなるまでうち遣つて置いたもの

老子
二卷
子書
支那周代の哲
人老子の教を
傳へた書

と見える。手には鐵鉢を持つてゐる。

僧は黙つて立つてゐるので、閻が問うて見た。「わたしに逢ひたいと云はれたさうだが、なんの御用かな。」

僧は云つた。「あなたは台州へお出でなさることにおなりなすつたさうでございませぬ。それに頭痛に悩んでお出でなさると申すこととでございませぬ。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました。」

「いかにも言はれる通りで、其の頭痛のために出立の日を延ばさうかと思つてゐますが、どうしてなほしてくれられる積りか、何か藥方でも御存じか。」

「いや。四大の身を惱ます病は幻でございませぬ。唯清淨な水が此の受糧器に一ばいあれば宜しい。呪てなほして進ぜ

ます。」

「はあ呪をなさるのか。」かう云つて少し考へたが、子細あるまい、一つまじなつて下さい」と云つた。これは醫道の事などは平生深く考へてもをらぬので、どう云ふ治療ならさせる、どう云ふ治療ならさせぬと云ふ定見がないから、唯自分の悟性に依頼して、其の折々に判断するのであつた。今乞食坊主に頼む氣になつたのは、なんとなくえらさうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでする呪なら間違つた所で危険な事もあるまいと思つたのとのためである。

閻は小女を呼んで、汲み立ての水を鉢に入れて來いと命じた。水が來た。僧はそれを受取つて、胸に捧げて、じつと閻を見詰めた。暫く見詰めてゐるうちに、閻は覺えず精神を僧の

捧げてゐる水に集注した。

此の時僧は鐵鉢の水を口に銜んで、突然ふつと閻の頭に吹きかけた。

閻はびつくりして、背中に冷汗が出た。

「お頭痛は」と僧が問うた。

「あ。癒りました。」實際閻はこれまで頭痛がする、頭痛がすると氣にしてゐて、どうしても癒らせずにゐた頭痛を、坊主の水に氣を取られて、取逃してしまつたのである。

僧は徐ろに鉢に残つた水を床に傾けた。そして、そんならこれでお暇をいたしますと云ふや否や、くるりと閻に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。
「まあ、一寸」と閻が呼び留めた。

僧は振返つた。「何か御用で。」

「寸志のお禮がいたしたいのですが。」

「いや。わたくしは群生を福利し、憍慢を折伏するために、乞食はいたしますが、療治代は戴きませぬ。」

「なる程。それでは強ひては申しますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺つて置きたいのですが。」

「これまでをつた處でございますか。それは天台の國清寺で。」

「はあ。天台にをられたのですな。お名は。」

「豊干と申します。」

「天台國清寺の豊干と仰しやる。」閻はしつかりおぼえて置かうと努力するやうに、眉を顰めた。「わたしもこれから台州

豊干
唐代の奇僧

へ往くものであつて見れば、殊さらお懐かしい。序でだから伺ひたいが、台州には逢ひに往つて爲になるやうな、えらい人はをられませんかな。」

「さやうでございます。國清寺に拾得と申すものがをります。實は普賢でございます。それから寺の西の方に寒巖と云ふ石窟があつて、そこに寒山と申すものがをります。實は文殊でございます。さやうならお暇をいたします。」かう言つてしまつて、ついと出て行つた。

かう云ふ因縁があるので、閻は天台の國清寺をさして出かけるのである。

閻は衣服を改め、輿に乗つて、台州の官舎を出た。従者が數

普賢
菩薩
釋迦如來の右脇士
行徳を司どる
文殊
菩薩
釋迦如來の左脇士
智徳を司どる

椒江
現中華民國浙
江省を流れる
川

十人ある。

時は冬の初で、霜が少し降つてゐる。椒江の支流で、始豊溪と云ふ川の左岸を迂回しつゝ北へ進んで行く。初め陰つてゐた空がやう／＼晴れて、蒼白い日が岸の紅葉を照らしてゐる。路で出合ふ老幼は、皆輿を避けて跪く。輿の中では閭がひどく好い心持になつてゐる。牧民の職にゐて賢者を禮すると云ふのが、手柄のやうに思はれて、閭に満足を與へるのである。

台州から天台縣までは六十里半程である。日本の六里半程である。ゆる／＼輿を昇かせて來たので、縣から役人の迎へに出たのに逢つた時、もう午を過ぎてゐた。縣令の官舎で休んで、馳走になりつゝ、聞いてみると、こゝから國清寺までは、

天台

天台山
浙江・福建省と江西省の界に横たはる
仙霞嶺山脈北
端の一高峰
智者大師
天台大師
智顛
支那天台宗の
開祖
皇紀一二五七
年歿
隋
支那の國號
皇紀一二四一
—一二七七年
楊帝
隋の第二世皇
帝
皇紀一二七八
年歿

爪先上りの道が又六十里ある。往き著くまでには夜に入りさうである。そこで閭は縣令の官舎に泊ることにした。

翌朝縣令に送られて出た。けふもきのふに變らぬ天氣である。一體天台一萬八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるやうだが、兎に角虎のゐる山である。道はなかなかきのふのやうに捗どらない。途中で午飯を食つて、日が西に傾きかゝつた頃、國清寺の三門に著いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝が立てたと云ふ寺である。

寺でも刺史の御參詣だと云ふので、おろそかにはしない。道翹と云ふ僧が出迎へて、閭を客間に案内した。さて茶菓の饗應が濟むと、閭が問うた。「當寺に豐干と云ふ僧がをられましたか。」

道翹が答へた。「豊干と仰しやいますか。それは先頃まで、本堂の背後の僧院にをられましたが行脚に出られたきり、歸られませぬ。」

「當寺ではどう云ふ事をしてをられましたか。」

「さやうでございます。僧共の食べる米を舂いてをられました。」

「はあ。そして何か外の僧達と變つたことはなかつたのですか。」

「いえ、それがございましたので、初め唯骨惜しみをしない、親切な同宿だと存じてゐました豊干さんを、わたくし共が大切にいたすやうになりました。すると或日ふいと出て行つてしまはれました。」

「それはどう云ふ事があつたのですか。」

「全く不思議な事でございます。或日山から虎に騎つて歸つて參られたのでございます。そして其の儘廊下へ這入つて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一體詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。活きた阿羅漢ですな。其の僧院の趾はどうなつてゐますか。」

「只今も空家になつてをりますが、折々夜になると虎が參つて吼えてをります。」

「そんなら御苦勞ながら、そこへ御案内を願ひませう。」
かう云つて、閻は座を起つた。

道翹は蜘蛛の網を拂ひつゝ先に立つて、閻を豊干のゐた空家に連れて行つた。日がもう暮れかゝつたので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つ無い。道翹は身を屈めて石疊の上の虎の足跡を指さした。偶、山風が窓の外を吹いて通つて、堆い庭の落葉を捲き上げた。其の音が寂寞を破つてざわざわと鳴ると、閻は髪の毛の根を締めつけられるやうに感じて、全身の肌に粟を生じた。

閻は忙しげに空家を出た。そして跡から附いて来る道翹に言つた。「捨得と云ふ僧はまだ當寺にをられますか。」

道翹は不審らしく閻の顔を見た。「よく御存じてございませう。先刻あちらの廚で、寒山と申すものと火に當つてをりましたから、御用がおりなさるなら、呼び寄せませうか。」

「ははあ。寒山も來てをられますか。それは願つても無い事です。どうぞ御苦勞序でに廚に御案内を願ひませう。」



(筆輝額傳)得捨山寒

「承知いたしました」と

云つて、道翹は本堂に歩いて西へ歩いて行く。

閻が背後うしろから問うた。

「捨得さんはいつ頃から當寺にをられますか。」

「もう餘程久しい事で

ございます。あれは豊干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます。」

「はあ。そして當寺では何をしてをられますか。」

賓頭盧尊者
十六羅漢の第

「拾はれて參つてから三年程たちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、其の外供へものをさせたりいたしましたさうでございます。其のうち或日上座の像に食事を供へて置いて自分が向き合つて一しよに食べてゐるのを見つけられましたさうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずにしたことと見えます。只今では廚で僧共の食器を洗はせてをります。」

「はあと云つて、閻は二足三足歩いてから問うた。「それから只今寒山と仰しやつたが、それはどう云ふ方ですか。」

「寒山でございますか。これは當寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでをりますものでございます。拾得が食器を洗ひます時、残つてゐる飯や菜を竹の筒に入れて取つて置き

ますと、寒山はそれを貰ひに參るのでございます。」

「なる程」と云つて、閻はついで行く。心の中では、そんな事をしてゐる寒山拾得が文殊普賢なら、虎に騎つた豐干はなんだらうなどと、田舎の人が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな氣分になつてゐるのである。

「甚だむさくるしい所で」と云ひつゝ、道翹は閻を廚の中に連れこんだ。

こゝは湯氣が一ぱい籠つてゐて、遽に這入つてみると、しかと物を見定めることも出来ぬ位である。其の灰色の中に大きい竈が三つあつて、どれにも残つた薪が眞赤に燃えてゐる。暫く立止つて見てゐるうちに、石の壁に沿うて造りつけてあ

る卓の上で、大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜から移してゐるのが見えて來た。

此の時道翹が奥の方へ向いて、「おい、捨得」と呼び掛けた。

閻が其の視線を辿つて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧が蹲つて火に當つてゐるのが見えた。

一人は髪の毛の二三寸伸びた頭を剃き出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる。どちらも痩せてみすぼらしい小男で、豊千のやうな大男ではない。

道翹が呼び掛けた時、頭を剃き出した方は振向いてにやりと笑つたが、返事はしなかつた。これが捨得だとみえる。帽を被つた方は身動きもしない。これが寒山なのであらう。

閻はかう見當を附けて二人の傍へ進み寄つた。そして袖を搔合はせて恭しく禮をして、朝議大夫、使持節、台州の刺史、上柱國、賜緋魚袋、閻丘胤と申すものでございますと名告つた。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合はせて腹の底からこみ上げて來るやうな笑ひ聲を出したかと思ふと、一しよに立上つて、廚を駈け出して逃げた。逃げしなに寒山が、豊千がしやべつたなと云つたのが聞えた。

驚いて跡を見送つてゐる閻が周圍には、飯や菜や汁を盛つてゐた僧等が、ぞろ／＼と來てたかつた。道翹は眞蒼な顔をして立ち竦んでゐた。

(鷗外全集)

五十嵐力
國文學者

文學博士

早稻田大學教

授

米澤市の人

明治七年生

思無邪

詩三百、一言

以蔽之、曰、

思無邪。

(論語)

枕草子

平安朝中期に

成った隨筆

清少納言作

一二 隨筆の説

五十嵐 力

隨筆にいろ／＼ある。

一つは思無邪の心から、ぼろり／＼とこぼれ落ちるのだ。ぼたり／＼と滴り落ちるのだ。緒で繫げば數珠にも瓔珞にもなるが、それを繫がずに、ぼろり／＼、ぼたり／＼のままにして眺める味だ。頑是ない子供の順序もない愛嬌おしやべりの味がそれだ。土筆や蕨が、思ひ出したやうに、あちこちに土から顔を出してゐる、あの味だ。

我が國の隨筆で、一番この味を得てゐるのは枕草子だ。思ひ出すまゝに、無邪氣に無遠慮に並べる。後先を考へない。但聯絡に心をとめない。統一などには尙更目をくれない。但

し言ふ事は必ず思ふ事だ。それには、ふと浮かんだばかりの心の影もあらう。長い深い執念のちらと顔を出すのもあらう。熟知熱愛の事物を一二語に煎じつめた出しぬけの表現もあらう。咽喉元に込みあげて來るのを抑へ切れずしてつい筆にした、法螺や戲言や憎まれ口もあらう。種類は千差萬別だが、しかし要するに、皆心に思つてゐる事だ。主觀的の眞實だ。そしてこれを言ふ根柢に於て思無邪だ。

この子供らしさと、我が儘と、負けじ魂と、かはつた趣味と、特殊の表現力と、それらが一つに渾融して出來た、ちり／＼ばらばらの散珠文學、曼陀羅文學、それが枕草子の身上だ。それが、この草子が同種の文學のあひだに無類の地位を占める所以だ。

隨筆のもう一つは、知り盡くし、悟りぬいた人の、心の鏡に映つた影の自由な捕捉だ、とりとめもない記載だ。書く事は天地人獸蟲魚草木の萬般にわたるが、知りぬいた心の現れには、知識を誇るいさゝかの厭味もない。言ふところは往々にして説法にもなり教訓にもなるが、悟り切つた心の所産には、いさゝかの物訓へぶりの氣障さもない。第一種に比べると、無邪氣な、出しぬけな、幼稚な、原始的な味は少いが、その斷片には、大きい豊かな背景を暗示する象徴的の味がある。大きい心が無邊雑多の外境に觸れて、融通無礙に、大自由無束縛に動き變るのを氣樂に見るといふ、心往く味がある。随つて、そこはかどなきよしなし言が、堂々たるよしあり言の及ばぬ趣を見せる。これがこの種の隨筆の特殊の味だ。我が國の文學で一

徒然草

二卷

吉野朝時代に
成つた隨筆
吉田兼好作

番これに近いのは徒然草だ。

隨筆の中の最も低級なのは、物識り隨筆と物訓へ隨筆とだ。知識を誇る隨筆と、教訓を押賣りする隨筆と、世にこれほど情ないものはない。江戸時代に出來たいはゆる隨筆にはこの類が多い。彼等の大部分は術學だ、材料の蒐集だ。文學ではない。

あらゆる隨筆の中で最も隨筆らしいのは、第一種の出しぬけ式思無邪式な原始的なものだが、しかしながら最も圓熟して趣味に富み、氣品の高いのは、恐らく、學識修養經驗に於て豊さを極めた至人の、限りなき精神的貯蓄が自然に滴り出でた、まに／＼草であらう。無限量の經驗の中に醸し成された靈液が、移り變る外境に應じて、ランビキに掛けたやうにぼつた

論語 二十卷
經書 孔子の言行録 四書の一
語録

りぼつたりと滴り落ちる。それが藝術的な磨きのかゝつた詞に現され、最小の形の中に最大の意義を見せて、繋がれぬ珠玉の如く、無造作にころ／＼並びに並ぶ。世にもしこんな隨筆があつたら、いかに尊いことであらう。論語や老子は、その出來た形について見ると、人生修養の方面のみに於て、ほゞこれに近いものといふことが出来る。

(國文學者一夕話)

本語、ア、レ

清少納言

清原元輔の女
一條天皇の皇
后に仕へた

一三 桃の木

清少納言

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒畠などいふところの、土もうるはしう直からぬに、桃の木なつたしの若わかだちで、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く、いま片つ方は濃くつやゝかにて、蘇枋の色なるが、日かげに見えたるを、いと細やかなる童の、狩衣はかけ破りなどして、髪はうるはしきがのぼりたれば、また紅梅の衣白きなどひきはこえたる男兒おとこ、半靴はうくわはきたる、木のもとに立ちて、我によき木切りて、いでなど乞ふに、また髪をかしげなるわらはべの、袖みそども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち著たるみたり三四人、卯槌うづちの木のよからむ

一三 桃の木

九九

伊勢大助

馬内侍

紫式部

和泉式部

赤染衛門

五歌仙

清原元輔

藤原元輔

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

藤原元成

切りておろせ。お前にも召すぞなどいふに、おろしたれば、走りかひ、取りわき、われに多くなどいふこそをかしけれ。黒き袴著たるをのこはしり来て乞ふに、待てなどいへば、木のもとによりて引きゆるがすに危がりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

殿上より、梅の花の皆散りたる枝を、これはいかにといひたるに、唯、はやく落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦して、黒戸に殿上人いと多く居たるを、うへの御前聞かせおはしまして、よろしき歌など詠みたらむよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

はやく落ちにけり
大庖嶺之梅早落、誰問粉粧。
(大江維時)
黒戸御所
清涼殿の北に在る御間
うへの御前
一條天皇
第六十六代

うつくしきもの。ふりに書きたる乳兒の顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。又へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲なども来てくゝむるもいとらうたし。三つばかりなる乳兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳兒の、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。大きにはあらぬ殿上わらはの、装束きたてられてありくもうつくし。をかしげなる乳兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを池より取りあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何もくちひさき物は、いと

嵯峨野 現京都市の内
 いなび野 印南野
 交野 現兵庫縣の内
 現大阪府の内
 こま野 未詳
 粟津野 現滋賀縣の内
 飛火野 現奈良縣の内
 しめぢ野 現奈良縣の内
 そうけ野 共に未詳
 安部野 現大阪府の内
 宮城野 現宮城縣の内
 春日野 現奈良縣の内
 むらさき野 紫野
 現京都市の内

うつくし。いみじう肥えたる乳兒の二つばかりなるが、白う
 うつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて襷あげたるが、這
 ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこ
 の聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。雞の雛の足高
 に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよ／＼とかしがまし
 く鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親どもにつれだち
 て走るも、みなうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

野は。嵯峨野さらなり。いなび野。交野。こま野。粟津
 野。飛火野。しめぢ野。そうけ野こそすゝろにをかしけれ
 などさつけたるにかあらむ。安部野。宮城野。春日野。む
 らさき野。

讀經は。ゆふぐれ。

あそびは。よる、人の顔見えぬほど。

月のいとあかきに、川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの
 われたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

たゞ過ぎに過ぐるもの。帆あげたる船。人のよはひ。春

夏秋冬。

(枕草子)

枕草子
 三卷・五卷又
 は七卷
 平安朝中期に
 成つた隨筆

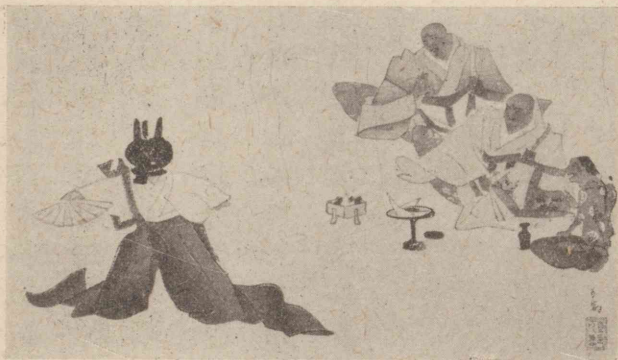
一四 法師の話

吉田兼好

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心
 うく覺えて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちより詣でけり。
 極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。
 さてかたへの人に逢ひて、年比おもひつる事果し侍りぬ。聞
 きしにもすぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごと
 に山へのぼりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へま
 ゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。
 すこしの事にも、先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、お

吉田兼好
 本姓卜部
 出家
 歌人
 元左兵衛尉
 正平五年(二
 〇一〇)歿
 年六十八
 仁和寺
 現京都市右京
 區御室に在る
 眞言宗の名刹
 石清水
 石清水八幡宮
 現京都府綴喜
 郡八幡町の男
 山に在る官幣
 大社
 祭神譽田別尊
 外二座
 極樂寺
 男山の麓に在
 つた八幡宮の
 末社
 高良
 同所に在る八
 幡宮の末社



仁和寺の僧鼎の圖

のおの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍らなる
 足鼎をとりて頭にかづきたれば、つ
 まるやうにするを、鼻をおしひらめ
 て、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、
 満座興に入ること限りなし。
 しばしかなでて後、ぬかんとする
 に、大かたぬかれず。酒宴ことさめ
 て、いかゞはせんとまどひけり。と
 かくすれば、頸のまはりかけて、血た
 りたゞ膨れに膨れみちて、息もつま
 りければ、打ちわらんとすれど、たや
 すくわれず、ひゞきて堪へがたかりければ、かなはで、すべきや



うなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人のあやしみ見ることに限りなし。醫師のもとにさし入りて、向かひゐたりけんありさま、さこそ異様なりけめ。物をいふもくゞもり聲にひゞきて聞えず。かゝる事は文にも見えず、傳へたる教もなしといへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上によりゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝるほどに、あるものいふやう、たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなか生きざらん。たゞ力をたてて引き給へ」とて、藥のしべをまはりにさし入れて、かねをへだてて頸もちぎるばかりに引きたるに、耳鼻かけうげながら、抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

行願寺
現京都市中京
區竹屋町に在
る天台宗の寺

「奥山に猫またといふものありて、人をくらふなると人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて人となることはあなるものをといふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の行願寺の邊にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞひとりかへりけるに、小川のはたにて、音にきく猫また、あやまたず足許へふと寄り來て、やがてかきつくまゝに頸のほどをくはんとす。肝心もうせて、ふせがんとするに力もなく、足もたたず、小川へころび入りて、たすけよや猫また、よやく」とさけば、家々より松

どもともして、走りよりて見れば、此のわたりに見知れる僧なり。こはいかにとて、川の中より抱きおこしたれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など懐に持たりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふく家に入りけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りてとびつきたりけるとぞ。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷してめでたくつくり。しだのなにがしとかや、しる所なれば、秋の頃、聖海上人、其の外も人あまた誘ひて、いざ給へ、出雲拜みに。かいもちひめさせんとて具しもていきたるに、各拜みてゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子、狛犬、背きてうしろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや。此の獅子の立ちやう、

丹波 現京都府及び兵庫縣の内
出雲 現京都府南桑田郡千歳村出雲
大社 出雲大社 現島根縣鏡川郡大社町に在る官幣大社
祭神大國主命

いとめづらし。ふかき故あらんと涙ぐみて、いかに殿原、殊勝の事は、御覽じとがめずや。無下なりといへば、各あやしみて、「まことに他に異なりけり。都のつとにかたらんなどいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、此の御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることに侍らん。ちと承らばや」といはれければ、其の事に候さがなきわらはべども、の仕りける、奇怪に候ことなりとて、さしよりて据ゑなほしていなければ、上人の感涙いたづらになりけり。

高野の證空上人、京へのぼりけるに、細道にて馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口ひきける男あしくひきて、聖の馬

高野 高野山 現和歌山縣伊都郡に在る古義眞言宗の總本山金剛峯寺の寺界

を堀へおとしてけり。

聖いと腹あしくとがめて、こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくのごとくの優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の悪行なりといはれければ、口ひきの男、いかに仰せらるゝやらん、えい聞き知らね、といふに、上人なほいきまきて、何といふぞ、非修非學の男とあらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬ひきかへして逃げられにけり。
たふとかりけるいさかひなるべし。

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、きはめて腹あ

公世の二位
藤原公世
從二位侍從
正安三年（一
九六一）歿
良覺僧正
比叡山に在る
天台宗の總本
山延曆寺の僧

惟繼中納言
平惟繼
興國四年（二
〇〇三）歿
年七十八
圓伊僧正
園城寺の僧
歌人
文保
花園・後醍醐
兩天皇の御代
の年號（一九
七七―一九七
八）

三井寺
園城寺
現大津市別所
に在る天台宗
寺門派の總本
山
徒然草
二卷
吉野朝時代に
成つた隨筆

しき人なりけり。坊の傍におほきなる榎木のありければ、人「榎木の僧正」とぞいひける。此の名しかるべからずとて、かの木をきられにけり。其の根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよゝはら立ちて、きりくひを掘りすてたりければ、其の跡おほきなる堀にてありければ、堀池の僧正とぞいひける。

惟繼中納言は風月の才にとめる人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめといはれけり。いみじき秀句なりけり。
(徒然草)

延曆寺
山阿弥
山坊師

松平定信
號は樂翁

徳川宗武の子
陸奥國(福島
縣)白川藩主
將軍家齊の輔

佐
文人
文政十二年
(二四八九)歿
年七十二

葉子

三卿

田守宗武子

万葉編

歌人

一五 學問

松平定信

「彼の人は雪螢あつめし窓に年をつみて、文見る道に心をつ
くし侍るなり。されば世の中の事にはいと疎く侍り」といへ
ば、さるこそまことの道學まなぶぶ人なりけれと褒めものする者あ
りとや。

もとより道學ぶ者は、五の常五の道よりして、人を修め、己を
修むる道學ぶより外の事はなし。されば世の事にさどく、今
のあたりのみかは、千年の先つ世の事、見ぬ唐の昔今のさまよ
り、盛り衰ふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさくさに
至るまでも明らかなるをこそ、道學ぶ人とはいふべけれ。こ
の世の事におろそかにては、いかで道學ぶ人とはいふべから

ん。

「學問は人の道まねぶことなり。漢詩つくり、文つくるはせ
んなし」とよく人のいふことなれど、みやびは花のかをりの如
く、物のうるほひの如し。まいて、彼の國の文字をおぼえてふ
み讀むとも、文字のつかひさまにて、深さ淺さの違ひめあるも
のにて、彼の國の人のごとは知り得がたかんめれど、さすがに
漢詩つくり文つくれれば、おのづから言葉の外なる心をも得る
ものとかや聞きぬ。されば、爲すにはしかじかし、などてこれ
を禁ずべき。

ある人、足の疾ありて歩むこともえせず、いといたう惱みて

けり。三年になりたれど、いさゝかおこたらざりしを、ある醫師見て、この薬まゐらすべし。三年も経なば常に復すべしといふを、さらば、その薬飲みてんといふ。

かたはらの者打聞きて、この上三年とては六年の間の苦しみなるをといへば、さにはあらじ。その薬によりて、三年たちもとに復するならば、まづ一年たちなば今よりはいさゝかよかるべし。二年たちなば尙よかるべし。かくて三年にてもとに復しなん。いかて三年がうち今の如くにして、三年たちしとて俄にもとに復すべきか。今よりいさゝかにても年を追うてよからば、三年は更なり、九年にてもあれ、薬飲みなんといひき。

久方の空ウツクに任かせて、我がさゝやかなる才を用ひざれ」とはいへど、空に任かするに深き心あるべし。

星の光みても、はや沖はあらし風吹き出でつ、このあたりへは明日の晝つかた吹き來べしといふ事知れ、ば心して乗るをこそ、空に任かすとはいはめ。沖の風吹くも吹かぬも問はずして、今こゝの波平かなれば、はや漕ぎ出でて行くを、空に任かすとはいはじ。

もの食ふ事にもあれ、すべて身をやしなふ道をつくし、そのほどを慎みて後、生死を空に任かすべきを、やしなひの事は心とせず、たゞ己が欲りする事にのみ隨ひて、生死を空に任かすといふ事もありぬべし。

(花月草紙)

一六 雅文四篇

隅田川の雨

橋 千 蔭

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に往きて宿りぬ。

有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮かびかつ消ゆる水

橋千蔭
國學者 歌人
號は芳宜園
江戸の人
文化五年(二
四六八)歿
年七十四
石濱
現東京市淺草
區石濱町附近
一帯の地

秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵に往きて宿りぬ。

秩父の山
現關東平野の
西部に横たは
る連山

沫にこそ雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく潮にもまじらで、とはに縹の色に流れ往にて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。うち向かふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、其の隙々より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう／＼にうす墨もてかきけちたらむ如く、いとしも遙けきは、たゞ靡かぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより鴉の飛び行きつ、^時鷺の翼重げに起き出でて、川の瀬の眞菰に下り立てば、みさこの群れきて、水の面に浮かべるもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠きて、棹を筏の上^にに横たへ、己たむだきて、思ふ事なげにてをり、筏は水のまにまに流れ行くも静けし。渡し守舟さし出せば、大笠傾けてわた

筑波嶺
筑波山
現茨城縣筑波
眞壁・新治三
郡の界に在る

うけらが花
七卷
歌文集
享和二年(二
四六二)刊

り行く人のやがて堤を歩くさまも繪によく似たり。すべて
ひと日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも
風通ひ来て、岸の木立も長き堤も、或はあらはれ、或はかくれて、
限りなき青海原に向かひたらむやうに覺ゆる折もありけり。
かくてや、夕ぐれ近くなりゆけば、群鳥のおのがじし、時も
とむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむ方な
し。暮れはても猶行く水の色のみ遠白く残りて、川添小田
にいはいへるみくまりの神の御火の、海人のいさりともいふべ
く、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川たが墨がきのす
さびなるらむ

(うけらが花)

村田春海

號は琴後翁
國學者 歌人

江戸の人
文化八年歿
年六十六

芳宜園

橘千蔭の居宅
の雅名

來てふにも云々
月夜よし夜よ
しと人につげ
やらばこてふ
に似たり待た
ずしもあらず
(古今集)

曇る夜の月

村田春海

芳宜園の月のまとゐは年ごとのちぎりなれば、來てふにも
似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々詣て來にけり。さるは
降りくらしたる雨の名残、霽れゆかむ空もおぼえず、ましてさ
やけき光待ち出でむはいと、心もとなきを、更けゆかばかく
のみにあらしを、今宵は寝ねて明かしてましなどいひつゝ、
伊豫簾むなしうか、けて空のみうちまもらるゝもいとわり
なしや。今宵は名におふ園生の花もいたづらに夜の錦にて、
浅茅がもとの松蟲のみ、やうく聲添はりゆくも猶あかぬわ
ざながら、さすがにあはれは添へつべし。

はれ間なき月をいかにといひひてそらなが

琴後集
十五卷
歌文集
文化七年刊

清水濱臣
號は泊酒舍
國學者
江戸の人
文政七年(二
四八四)歿
年四十九

泊酒文藻
文集

めにや今宵あかさむ
かきくらす雲間の影はうとくとも月まつ蟲よ
せめて語らへ

(琴後集)

砧を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみた
ゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらむ、砧
の音の雁がねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。
そも此の音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうき
ゆゑか。皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。

(泊酒文藻)

中島廣足

號は樞閣
國學者
肥後國(熊本
縣)熊本藩士
文久三年(二
五二三)歿

夜學

中島廣足

寺々の初夜の鐘の響もをさまりて、皆人もいねたるにいと
嬉しう、燈火あかくしなして文机にうち向かひたる、いみじう
心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知
られて、深き心ばへあるくたり、も自ら解き得らるか。し。
掲げ盡くしてもなほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ、見も
てゆくに遠き世の人もたゞさし向かひ語らふ心地す。冊子
つくりて、をかしきふし、或はふと思ひ得たることなどを
ば、墨おしすりつゝ、書きつけなどするもをか。雞の聲は夜
深きにやと思ふに、いとく明けはなれたる、しばしとてうち
ねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。

(樞閣文集)

樞閣文集
三卷
文集
天保十年(二
四九九)刊

近世日本

口氏史

著述家 熊本縣の人

口氏友社

文久三年(二五二三)生

口氏友社

象山

口氏友社

佐久間象山

口氏友社

名は啓

口氏友社

通稱修理

口氏友社

信濃國(長野縣)松代藩士

口氏友社

元治元年(二五二四)歿

口氏友社

年五十四

口氏友社

松陰

口氏友社

吉田松陰

口氏友社

名は矩方

口氏友社

通稱寅次郎

口氏友社

長門國(山口縣)萩藩士

口氏友社

安政六年(二五一九)歿

口氏友社

年三十

口氏友社

勝海舟

口氏友社

名は安芳

口氏友社

舊幕臣

一七 象山と松陰

徳富蘇峰

嘗て勝海舟翁に聞く。翁の壯なるや、佐久間象山の家に於て一個の書生を見る。鬢髮蓬に似て、癯骨衣に勝へざるが如く、而して小倉織の短袴を著く。曰く、是吉田寅次郎なりと。若し壯年以後の松陰に及せし個人的影響の大なるものを求めば、象山を以て其の最とせざるべからず。松陰を知らんと欲せば、勢ひ此の人を知らざるべからず。

人は自ら知るより明らかなるはなし。彼が人物は、一部の省譽録之を語りて餘りあり。蓋し此の書は、彼が松陰蹈海の罪に坐して獄に繋がれし七箇月間の感想を、赦免の後に黙録臆記したるものにして、松陰の幽室文稿と其の趣を同じうす。

唯幽室文稿は、安政三年丙辰の正月より、六年己未の五月江戸に檻送せらるゝまで、三箇年半の記録なれば、其の記事の詳略精粗に至りては同日の論にあらず。然れども、幽室文稿が活



山象間久佐

ける松陰の自傳たるが如く、省譽録は活ける象山の精神的影像なり。彼が血を以て書かれたる懺悔録ならば、此は鋼筆を以て鐫られたる記念碑なり。若

しそれ松陰の活動的にして無事に苦しむところ、其の不屈なる精神の沸騰するところ、其の恐しきまで眞摯なるところ、其の天地をも動かさんとする熱情を有するところ、其の天真爛

省譽録 一卷
時事感想録
蹈海の罪
安政元年米艦に投じて密航を計つた罪
幽室文稿
六冊
時論集
安政三年
二五一六年
孝明天皇の御代

瑕瑜云々
瑕不掩瑜
瑜不掩瑕
忠也。(禮記)

天民の先覺
天之生此民一
也。使先知覺
後知。使先覺
覺後覺。予天
民之先覺者也。
(孟子)

A. Connel

漫にして瑕瑜相掩はざるところ、悉く擧げて幽室文稿にありとせば、象山の天下擧つて是とするも之を信ぜず、天下悉く非とするも之を疑はざる自信力、自ら造化の寵兒を以て任じ、天民の先覺を以て居る大抱負、莊重にして犯すべからざる其の風采、古今に通じ天人を極めたる其の博識、空想を賤しみ實學を務め、飽くまで經驗的知識を重んずる其の識見、擧げて悉く省譽録にありとせざるべからず。二書の相異なるは、猶二人者の相同じからざるが如し。

象山の象山たるは、己が信ずるところを公言せずんば敢へて休せざる光明なる意氣と、己が信ずるところにあらざれば之を公言する能はざる正大なる精神とにあり。彼嘗て歌うて曰く、「こころみにいざや呼ばはん山彦のこたへだにせば聲

オコンネル
1775-1847
アイルランド
の政治家

嘉永四年
二五一年
孝明天皇の御
代



松田 吉 陰

は惜しまじ」と。是、豈、勸化の好手段は反響の來るまで絶叫するにありてふ、オコンネルの言と其の意を同じうして、其の趣更に深きものにあらずや。象山の松陰を得、松陰の象山に逢ふ、また偶然にあらずといふべし。

彼等の相見るや、實に嘉永四年、江戸に於てす。松陰謂へらく、象山は畢竟洋學を嚮ぎて自ら給する賣儒ならん。象山儼然として曰く、乃ち平服のまゝにて其の門に入る。象山儼然として曰く、貴公は學問する積りか、言葉を習ふ積りか。若し學問する積りならば、弟子の禮を執りて來れ」と。松陰輒ち歸りて衣服

遠州洋
現静岡・愛知
兩縣の南部に
面する太平洋
の一部

を改め、上下を著して其の門に入れり。當時松陰は二十二歳の青年にして、象山は四十一歳の宿儒（宿儒、しゆくじゆ）しかも其の盛名既に天下を掩ふ。後、松陰人に語つて曰く、我山に於ては富嶽の高きを見、水に於ては遠州洋の深きを見、人に於ては佐久間先生を見る（佐久間先生、さくまけんせいしやう）と。其の始に於ては専ら漢蘭學藝の事を學び、後遂に天下の大勢を問ふ（問ふ、とんぶ）に至りぬ。

彼等は其の年齢の相距ること十有九。松陰は率直に過ぐる程率直なり、象山は莊重に失する程莊重なり。松陰は木綿服に小倉織の短袴（短袴、たんかば）を著し、象山は綸子の被風（被風、ひかぜ）を纏ひ、儼然として虎皮に坐す。松陰は翰を揮ふ飛ぶが如く、字體の大小、筆墨紙の精粗、擇むところなきも、象山は片言隻句といへども、奉書紙にあらざれば書せず。松陰は謙虛益を求め、象山は昂然天

一笑一顰を云々
吾聞明主之愛
一頓一笑、頓
有爲顰、而笑
有爲笑、
（韓非子）
禮儀三百云々
優々大哉、禮
儀三百威儀三
千、待其人而
後行。
（中庸）

下の師を以て自ら居る。松陰は赤裸々の心事を赤裸々に發表すれども、象山は苟も人に許さず（許さず、ゆるさず）甚だ一笑一顰を吝み、禮儀三百、威儀三千の中に高く標置す。松陰は質樸なるを以て英雄の本色となし、象山は質樸ならざるを以て英雄の本色となす。松陰は恆に直徑を取りて活動し、今日の事をして今日の事をなさしめよといひ、象山は廟算定まらざれば一步も動くを欲せず、其の眼界は遠く百年に及ぶ。其の相反する實にかくの如し、而して其の相反するは、即ち相得る所以なるか。松陰曰く、象山高突兀（高突兀、たかすつぐつ）雲翳可仰難（雲翳可仰難、うんいやくやうがたし）何日天風起、快望狡猊蟠（快望狡猊蟠、くわいぼうけういばん）と。二人の關係又以て見るべきにあらずや。

松陰が亡邸後、更に十年の遊學を請うて再び江戸に出づるや、時勢は一層の切迫（切迫、せつぱく）を來し、二人は一層の親密を加へたり。

亡邸
嘉永四年の藩
邸出奔

江戸獄
傳馬町の獄
現東京市日本橋區小傳馬町に在つた幕府の牢獄

空行く田鶴云々
送行出郭門
孤鶴横秋爰
(象山)

こんなことをなつては知らず
なつて去るのこの秋も田鶴
たはしつて送つたことであらうか
こゝろはなつて分る。また
なるものも知れぬといふ
怪はあつた。

象山が松陰蹈海の罪に坐する、また所以なきにあらず。而して彼等の江戸獄中にあるや、唯法廷に於て相見るを得るのみ。然れども其の唱和の詩を讀めば、人をして感慨に堪へざらしむるものあり。象山曰く、寄語吾門同志士、莫將榮辱負初心と、松陰答へて曰く、已把死生附餘事、寧因榮辱負初心と。其の赤誠相許すに至りては、天も亦泣くべし。「かくとしも知らずや、去年の此の頃は、君を空行く田鶴にたとへし」と、これ象山が去年の送別を憶ひ、獄中にありて松陰に與へたるもの、憐むべし、彼等は今や秋爰に横たふ孤鶴にあらずして、鐵網に悲鳴する癡雞となれり。

東海道
江戸から京都へ至る街道
長州
長門國
現山口縣の内野山の獄
現同縣萩市に在つた萩藩の獄
平翁
象山
本姓平氏
ハリス
1804—1878
初代駐日米國公使
當時駐日總領事兼外交代表
桂小五郎
木戸孝允
萩藩士
明治十年歿
年四十五

拜して去る。今や乃ち地を隔つる三百里、毎に鶴唳雁語を聞き、俯仰徘徊自ら措く能はずと。又檻輿して東海道を過ぎ、長州に歸るや、歌うて曰く、龍水從信來、無情却有情、欲問故人事、只爲激怒聲と。彼は野山の獄中にありても、恆に象山に倦々たりき。彼は象山に對して師弟の誼あるのみならず、知己の感頗る深かりき。曰く、平翁眞吾師、期我以非常と。而して其の詠懷に於て屢之を漏らすのみならず、安政四年ハリスの江戸に入りし月に於ては、書を江戸にある桂小五郎に送り、夫象山

余年二十以後乃知匠夫有繫一國三
十以後乃知有象天下四十年後乃知有
繫五世界

象山平翁著

佐久間象山筆蹟

安政の大獄
安政五年大老
井伊直弼が條
約調印・家茂
迎立に反對し
た公卿・諸侯・
志士を處罰し
た事件

長防
長門國と周防
國
現山口縣
山階宮
山階宮晃親王

先生天下之士當爲天下之用、今而不用、天下其謂之何といひ、以て象山解放の轉旋を促したりき。彼は又安政六年四月二十五日、書を象山に與へて、幕府諸侯何處可恃、神州恢復何處下手、丈夫死所何處最當の三條を問ひ、且曰く、僕今世無益死無所進退維谷、幸進之道焉と。されど彼は其の教を聞くに及ばずして死所を得たり。何となれば其の五月二十五日は即ち彼が安政の大獄に羅織せられて東上したる日なればなり。運命は實に奇なるものなり。象山が九年の廢錮より起ち、幕府の徵命に應じ、和親開港、公武合體の政策を獻じ、公武の間に奔走するや、松陰によりて點火せられたる長防の尊攘黨は地を捲いて京師に押寄せ、將に時局打開の大活動を開始せんとしつゝありき。彼は京都にあり、開港の上書を袖にして、山

元治元年

二五二四年
孝明天皇の御

代

久坂玄瑞

名は通武

通稱義助

松陰の妹婿

萩藩士

元治元年歿

年二十五

寺島

寺島昌昭

通稱忠三郎

萩藩士

元治元年歿

年二十二

入江

入江弘毅

通稱萬吉

萩藩士

元治元年歿

年二十八

義卿

松陰の字

階宮に到らんとし、遂に暗殺せらる。實に元治元年七月十一日にして、松陰の徒、久坂寺島入江等が兵を提げて京都に入らんとするに先だつこと九日なりき。是より先、松陰の刑せらるゝや、其の絶命詞傳へて象山に到る。象山潸然として泣いて曰く、義卿は事業に急なり、今やかくの如しと。又彼自ら曰く、我本一丈夫、豈忘喪其元と、其の徵命に應ずる、深く決する所ありしを見るべし。是を要するに、象山と松陰と其の趨向相異なりと雖も、各身を以て其の信ずる所に殉じたり。また以て大丈夫たるに愧ぢずといふべし。

(吉田松陰)

夏目漱石
名は金之助
英文學者 小

説家

東京市の人

大正五年歿

年五十

ケーベル

1868-1933

哲學者

東京帝國大學

教師

ロシアの人

大正十二年歿

年七十五

安倍能成

甲武線

御茶の水・八

王子兩驛間の

舊私設鐵道

先生の住居

現東京市神田

區駿河臺二丁

目に在った

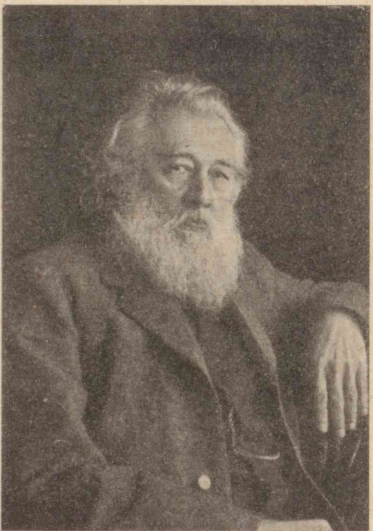
一八 ケーベル先生

夏目漱石

木の葉の間から高い窓が見えて、其の窓の隅からケーベル先生の頭が見えた。傍から濃い藍色の煙が立つた。「先生は煙草を吞んでゐるな」と余は安倍君に云つた。

此の前此處を通つたのは何時だか忘れてしまつたが、今日見ると、僅かの間にもう大分様子が違つてゐる。甲武線の崖上は軒竝新しい立派な家に建てかへられて、何れも現代的日本の産み出した富の威力と切り離すことの出来ない門構ばかりである。其の中に先生の住居だけが、過去の記念の如く、たつた一軒古ぼけたなりで残つてゐる。先生は此の煙ぶり返つた家の書齋にはいつたなり、滅多に外へ出たことがない。

其の書齋は取りも直さず、先生の頭が見えた木の葉の間の高い所であつた。



ケーベル先生

余と安倍君とは先生に導かれて、敷物も何も足に觸れない素裸の儘の高い梯子段を薄暗がりにながら上つて、階上の右手にある書齋にはいつたさうして先生の今迄腰をおろして窓から頭だけを出してゐた、一番光に近い椅子に余は坐つた。そこで外面から差す夕暮に近い明りを受けて始めて先生の顔を熟視した。先生の顔は昔とさまで違つてゐなかつた。先生は自分で六

十三だと云はれた。余が先生の美學の講義を聴きに出たのは、余が大學院にはいつた年で、たしか先生が日本へ來て始めての講義だと思つてゐるが、先生は其の時から已にかういふ顔であつた。先生に「日本に來てもう二十年になりますか」と聞いたら、さうはならない、たしか十八年目だ」と答へられた。先生の髪も髯も、英語で云ふとオーバーンとか形容すべきごく薄い麻の様な色をしてゐる上に、普通の西洋人の通り非常に細くて柔らかいから、少しの白髪が生えてもまるで目立たないのだらう。それにしても血色がもとの通りである。十八年を日本で住み古した人とは思へない。

先生の容貌が永久にみづ／＼しく見えるのに引きかへて、先生の書齋はぼけ切つた色で包まれてゐた。洋書といふも



先生の居住

のは、唐本や和書よりも裝飾的な背皮に、學問と藝術の派手やかさをしのばせるのが常であるのに、此の部屋は余の眼を射る何物をも藏してゐなかつた。たゞ大きな机があつた。色の褪めた椅子が四脚あつた。マッチと埃及煙草と灰皿があつた。余は埃及煙草を吹かしながら先生と話をした。けれども部屋を出て下の食堂へ案内されるまで、余は遂に先生の書齋にどんな書物がどんなに並んでゐたかを知らずに過ぎた。

花やかな金文字や赤や青の背表紙が余の眼を刺激しな

つたばかりではない、純潔な白色でさへ遂に余の眼には觸れずにすんだ。先生の食卓には常の歐洲人が必要品とまで認めてゐる白布が懸つてゐなかつた。其の代りにくすんだ更紗形を置いた布が一杯に被さつてゐた。さうして其の布は、此の間迄余の家に預つてゐた娘の子を嫁づける時に新調してやつた布團の表と同じものであつた。此の卓を前にして坐つた先生は、襟も襟飾も著けてはゐない。千筋の縮のシャツを著た上に、卵色の薄い背廣を一枚無造作に引つ掛けただけである。始から儀式ばらぬやうにとの注意ではあつたが、あまり失禮に當つてはと思つて、余は白いシャツと白い襟と紺の著物を著てゐた。「君が正装をしてゐるのに、私はこんな服なまで」と先生が最前いはれた時、正装の二字に痛み入るばかり

であつたが、成程洗ひたての白いものが手と首に著いてゐるのが正装なら、余の方が先生よりも餘程正装であつた。

余は先生に、「一人で淋しくはありませんか」と聞いたたら、先生は「少しも淋しくはない」と答へられた。「西洋へ歸りたくはありませんか」と尋ねたら、それ程西洋が好いとも思はない。しかし日本には演奏會と芝居と圖書館と畫館がないのが困る、それだけが不便だ」と云はれた。「一年位暇を貰つて遊んで來てはどうです」と促して見たら、「そりや無論やつて貰へるけれどもそれは好まない。私がもし日本を離れる事があるとすれば、永久に離れる。決して二度とは歸つて來ない」と云はれた。

先生は、斯ういふ風に、それ程故郷を慕ふ様子もなく、あなが

半島
ギリシヤ半島
サンダル
紐と底革とか
ら出来てゐる
簡素な履物

ち日本を嫌ふ氣色もなく、自分の性格とは容れにくい程に矛盾がちで亂雑な、空虚にして安つばい所謂新時代の世態が、周圍の過渡層の底から次第々々に浮き上つて、自分を其の中心に陥落せしめねば已まぬ勢を得つゝ進むのを、日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘所に見て、極めて落著いた十八年を我が國で過された。先生の生活は、そつと煤煙の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通ひ出した様なものである。雜鬧の中に己を動かして如何にも靜かである。先生の履む靴の底には敷石を噛む鋏の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作つたサンダルを穿いて、おとなしく電車の傍を歩いてゐる。先生は昔鳥を飼つてをられた。何處から來たか分からな

Edgar Allan Poe

ポー
1809—1849
アメリカの詩
人・小説家

ホフマン
1776—1822
ドイツの小説
家・作曲家・
漫畫家

いのを餌を遣つて放し飼ひにしたのである。先生と鳥とは妙な因縁に聞える。此の二つを頭の中で結びつけると一種の氣持が起る。先生が大學の圖書館で書架の中からポーの全集を引卸したのを見たのは昔の事である。先生はポーもホフマンも好きなのだと云ふ。此の夕、其の鳥の事を思ひ出して、「あの鳥は何うなりました」と聞いたら、「あれは死にました。凍えて死にました。寒い晩に庭の木の枝にとまつたまんま、翌日になると死んでゐました」と答へられた。

鳥の序でに蝙蝠の話が出た。安倍君が「蝙蝠は懷疑な鳥だ」と云ふから、「何故」と反問したら、「でも薄暗がりにはたゞ飛んでゐるから」と謎の様な答をした。余は蝙蝠の翼が好きだといつた。先生は「あれは惡魔の翼だ」と云つた。成程畫にある

悪魔は何時でも蝙蝠の翼を背負つてゐる。

其の時、夕暮の窓際に近く、蛾が来て、朗に鋭い聲を立てたので、卓を圍んだ四人はしばらくそれに耳を傾けた。「あの鳴き聲にも伊太利の聯想があるでせう」と余は先生に尋ねた。これは先生が少し前に「蜥蜴が美しい」と云つたので、「青く澄んだ伊太利の空を思ひ出させはしませんか」と聞いたら、「さうだと答へられたからである。しかし蛾の時には、先生は少し首を傾けて、「いや、あれは伊太利ぢやない、どうも伊太利では聞いたことがないやうに思ふ」と云はれた。

余等は、熱い都の中心に誤つて點ぜられたとも見える古い家の中で、靜かにこんな話をした。それから菊の話と椿の話と鈴蘭の話をした。果物の話もした。其の果物のうちで、最

久保也
現東北
平考
録

も香りの高い、遠い國から來たレモンの露を搾つて水に滴らして飲んだ。珈琲も飲んだ。總べての飲料のうちで珈琲が一番旨いといふ先生の嗜好も聞いた。それから靜かな夜の中に安倍君と二人で出た。

安倍君と一緒に大きな暗い夜の中に出た時、余は先生は是から先もう何年位日本に居る積りだらうと考へた。さうして一度日本を離れ、ばもう歸らないと云はれた時、先生の引用した「no more, never more」といふポーの句を思ひ出した。

(漱石全集)

大西祝

哲學者

文學博士

岡山市の人

明治三十三年

破年三十六

エビグラム

小諷詩

警句を以て成

る短言の詩

一九 俚諺論

大西 祝

羅馬の一詩人が、エビグラムを蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、
軀は小さしと云へるは、總べての俚諺にとは云ひ難からんも、
其の最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗
なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふ
べく、寸鐵人を刺すの妙あり。

俚諺は人口に膾炙し易からんことを求むる故に、おのづか
ら律語を爲す傾向あり。我が國語にては、五七又は七五が其
の自らなる律呂なれば、俚諺には此の律に隨へるもの甚だ多
し。「雉子も鳴かずばうたれまい」心の鬼が身を責めると云ふ
が如き、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をな

せるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ」おもふ念力岩
をも通す「身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」などは七七の調子
をなして、語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎては
只の人」と云ふも其の語に律あり。又「多勢に無勢」短氣は損氣
「弱り目に祟り目」所かはれば品かはる「勝つて兜の緒をしめよ」
と云ふが如く、同語又は同韻を重ねたるたぐひのものも少か
らず。

rhyme
alliteration

俚諺はかく律を成し、尾韻又は頭韻を合はするのみならず、
多くは具象的に言ひ做して感動の強からんことを求め、これ
が爲にしばしば誇張の言を喜ぶことあるは、詩歌に似たる點
なり。此の故に諺には、物の度量を言ふにも其の數又は量を
定めて言ふを好む。「七度搜して人を疑へ」人の噂も七十五日

預り物は半分の主などの類は數ふるに違あらず。數の中にても最も好んで用ゐらるゝは三の數なるべし。「三度目が定目」「三年たてば三つになる」「懺悔話をすれば三年の罪がほろびる」「三人よれば文殊の智慧」「三人よれば人中」「三度あることは三度ある」「朝起は三文のとく」「石の上にも三年居ればあたゝまる」「其の他猶多くあるべし。「用心は臆病にせよ」「黒犬に喰はれて灰の和滓におそれるなどは、誇張によりて其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを喜ぶ。「急がばまはれ」「言はぬは言ふにまさる」「逢ふは別れのはじめ」「論語よみの論語しらず」「人を使ふは使はれるなど其の例なるべし。かく相反するが如

paradox
loga 2 = loga (2+2) - loga 2

き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深遠なる智慧の一特徴なり。

パラドックスと云ふにはあらずとも、總じて反對のものを列ぶるは吾人の注意を捉ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥まうけ」「聞いて極樂見て地獄」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」「長者の萬燈より貧者の一燈などは其の例なり。

反對を置くのみならず、總じて二種の事柄を列べてそれを比照するは俚諺の一大特色なり。是、俚諺の比喻に富める所以にして、其の比喻の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多く此の類に屬す。「旅は道づれ、世はなさけ」と云ふ如きは、幾たび唱するも

照したるもの

其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木人は武士、是我が國民の、以てそれが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出てて聞け、風流の心に富める國民ならで誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ、如何に詩心道心宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮かび來るぞ。

かく二つの事を列べて相比照することなく、所謂暗喩を用ゐたるものも頗る多し。「蟹は甲に似せて穴をほる」「目くそ鼻くそを嗤ふ」と云ふ如きは此の例なり。又巧みに隱喩を用ゐたるも多し。例へば「商賣は牛のよだれ」^{得手}「帆をあげる」と云ふが如し。かく比喩の用法は種々あれども、寓言に於けるそれとは同じからず。寓言は敘事の體裁を具へ、俚諺は然らず。同じく意を寓して比喩を用ゐるも、寓言はこれを出來事

$$3a + \sqrt{5} \cdot a - \sqrt{28a} = a^2 - 3a$$

$$5a^2 + 28a - 210a \sqrt{5a} = a^4 - 6a^3 + 4a^2$$

$$4 \times 28a \times 5a^2 = a^4 - 6a^3 + 6a^2 + 28a$$

$$560a^3 = a^4 - 6a^3 + 6a^2 + 28a$$

又は動作として語り、俚諺はこれを時間に結ばずして常恆の事實として語る。

以上は俚諺が其の言表の仕方に於て詩句に似たる所あるを言へるなれど、唯其の形に於て然るのみならず、其の想に於ても詩趣を具ふるものの尠からぬは、上掲の諸例に於ても既に認知し得し所ならん。

一國民の言ひ慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史、氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點に於て諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。我が俚諺の中、今即座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、上に引ける「花は櫻木人は武士」と云ふ美しき諺は言ふも更

なり、武士は食はねど高楊枝、武士は相見互と云ふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる、武士と云ふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりて、此の如き理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ」と云ふをみば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふものの勢力を察知し得べく、女に家なし、貞女兩夫にまみえずなどは、我が國特有の諺とは云ふべからざるも、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる「老いては子に従へ」と云へば、家族制度を示す所あり。又「さはらぬ神に崇なし」棄てる神あれば助ける神あり、「神は正直のかうべにやどる」窮した時の神のみなどは、宗教思想を示すべく、袖振り合ふも他生の縁と云へば、以て

佛教によりて、養はれたる因果思想を見るに足るべし。これらは唯念頭に浮かびたるまゝ、數種の例を掲げたるに過ぎず。歐洲諸國の諺には、夫婦の關係を言へるもの甚だ多く、我が國の諺には寧ろ親子の關係を言へるもの多きが如し。「親の心子知らず」「子を知るもの親にしくはなし」「子ゆるゑの闇にまよふ」「孝行したい時に親はない」「かはい子には旅をさせよ」「子は三界の首枷」「子が思ふよりは親は百倍に思ふ」と云ふなど、親の慈を言ふや至れり盡くせり。其の上に、子よりも孫はかはいいと云へる、何の言か能くこれにまさりて子孫の愛のこまやかなることを言ひ表し得るものぞ。かく親の慈愛を稱ふると云ふものから、俚諺はまた能く人情の他面を言ふ。「子棄つる藪あれども身棄つる藪なし」とは何ぞ能く吾人の主我心を

言ひ穿てる。

一般の人情に、自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多く損得の念を主とせるものなるかを看よ、而して其中に如何に能く普通の人情を穿てるものあるかを看よ。下さるものは夏も御小袖かたきの家にも口をぬらせ「ころんでも只は起きぬ」泣く子も目を見る「誠に然り泣く子さへ自身を護るには油断なきなり。」油断大敵「小を棄てて大に就け」長いものには巻かれよ「曲らねば世に立たれず」など云ふ、何れか利益の念を主とせざる。聖人は知らざるを知らずとせよと云ひ、俚諺は知りて知らざれと云ふ。應は死すとも穂をつまみずなど、氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、かしこかれ損をすなと云ふにあり、故に立つて居るものは親でも使

知らざるを云々
知之爲知之
不知爲不知
是知也。
(論語)

へ」と云ふ。

俚諺は事の一面を見て、これを誇張して言ふの傾あるものから、其の他面を言ふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面より言ふところ、能く世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。「好きこそ物の上手なれ」と云へど、下手の横ずきと云ふを忘れず、「親に似ぬは鬼子」と云へば、形生めども心は生まずと云ふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、是即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言能く人情の裏面を許きて巧みに罵倒し了するものあり。

(大西博士全集)

二〇 川柳點

かみなりをまねて腹掛やつとさせ
 道問へば一度に動く田植笠
 本ぶりに成つて出て行く雨やどり
 祭から戻ると連れた子をくぼり
 生きもののやうにとらへるところでん
 うたゝ寐の枕四五冊引きぬかれ
 團扇賣少しあふいで出して見せ

早太
 猪早太
 源頼政の臣
 文王
 周の文王

源頼政の臣
 猪早太
 早太

おさへればすゝきはなせばきりぎりす
 手紙には狸臺には鯉をのせ
 通りぬけ無用で通りぬけが知れ
 義貞の勢はあさを踏みつぶし
 夜が明けて狩場狩場へ外科を呼び
 清盛の醫者ははだかで脈をとり
 そのくらさ早太櫻につつかゝり
 喰ひますかなどと文王そばへ寄り

源頼政の臣
 猪早太
 早太

二 法隆寺

高濱 虚子

高濱虚子
 名は清
 佛人 小説家
 松山市の人
 明治七年生

法隆寺
 法相宗三大本
 山の一
 現奈良縣生駒
 郡法隆寺村に
 在る

推古天皇十五
 年(二六七)
 聖德太子の御
 開創

金堂
 現存する世界
 最古の木造建
 築

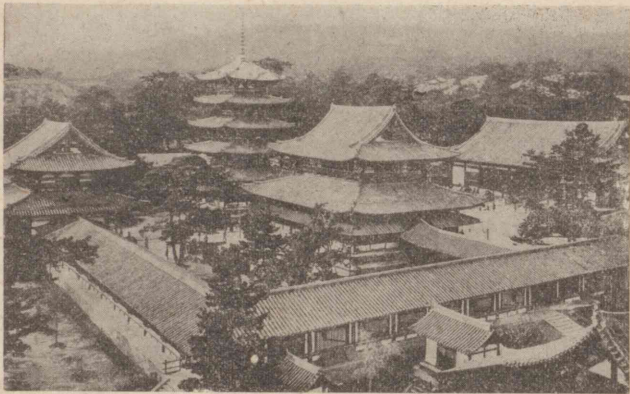
國寶建造物

壁畫
 金堂外陣の壁
 面に描かれた
 佛敎畫
 我が國最古唯
 一の壁畫
 國寶

法隆寺の金堂にはひつた。明るい所から急に暗い所にはひつたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして飛鳥佛のうしろが見えて来る。眞四角な天蓋が見えて来る。段々と様々な佛體が見えて来る。

案内者は壁の方を向いて、この壁畫は朝鮮の僧某が聖德太子の命を受けて描いたものだといふ。唯眞黒な壁と思つてゐたが、なるほど壁畫がある筈だと睨を据ゑて暗中を見ると暫くして纔かにそれらしいものが目に入る。よく見てみると頭らしいもの、顔らしいもの、手らしいものなどが段々見えて来る。人間よりも稍大きい位に描かれてゐる佛様が澤

山あるのであつた。案内者は、この彩色の中の丹いのは珊瑚



法隆寺全景

末だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、なるほど彩色がある。纔かに碧い色が見える、丹い色が見える。其處ばかりをじつと見てみると、乏しい光線も自らこれのみに集つて来るのかと思はれるやうに、段々其處が明るくなつて来て、その丹碧の色は浮き出るやうに目に入る。

畫だ。剥げてゐる。燻つてゐる。輪郭さへ明らかでない。

それにも拘らず、その丹碧の色は鮮かに目に入る。千年の古色を呈して、なほその中に鮮明な光を湛へてゐる。余は生をこの世に享けて以來、未だかかる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ。珊瑚の粉が壁土同様の様惜しげもなく磨りこんであるのだもの。

余はそれから玉蟲の廚子も見た。飛鳥佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものはない。佛體も一々見た。何れにも恍惚として目をつぶつたが、併しこの丹碧の色ほど強く心を



金堂西側大壁畫

玉蟲の廚子
金堂内陣に在る佛龕
推古天皇御物
國寶

夢殿
法隆寺東院の
本堂
國寶建造物

刺激したものは無かつた。

それから、金堂を出て夢殿の廊下を通つてゐる時、りん、りん、と物が鳴つた。案内者が、あの鈴は金鈴といつて、黄金を澤山に入れて拵へた鈴ださうですといつた。その音の好きと云つたら、喩へようにも物が無い。極樂浄土で鳴くといふ迦陵頻伽の聲も、恐らくかうまでではあるまいと思はれた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りん、りと鳴つた。あゝ、たまらない好い音だ、と立止つて耳を澄ました。この時ふと、案内者は鈴だと云つたが、もしか、彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし

(高濱虚子全集)

英文
東洋思想
「日本」
世界的有名

岡倉覺三 號は天心
明治畫壇の先
覺者
東京美術學校
長
横濱市の人
大正二年歿
年五十二
狩野芳崖
明治畫壇の大
家
長門國(山口
縣)の人
明治二十一年
歿年六十一

三三 狩野芳崖

岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分かる。上は則ち無量光明の淨界なり、
下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の金容端嚴にして、愁に
和して微笑を含み、左手に楊柳を執り、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ
來る無明空中一滴慈悲の水は、清魂の人間に歸るを送るもの
なり。赤子の合掌して、仰いで大士を見るものは、無智清淨に
して餘念を懐かず。亂山突兀、暮雲暗澹、雲冷やかに風荒る。
憐むべし、呱呱たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長
夜に迷ひ、那邊の淨地に向かつて如意心蓮を發き、再び慈悲の
海に溯るを得ん。嗚呼、是、芳崖狩野翁が畢生の傑作、觀音大士
の像なり。

Penalosa の
伊人
狩野翁
を
観
世
音
の
像
を
得
ん

翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若
くはなし。觀音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈
悲の精神なり、創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと



(筆山觀村下)三覺倉岡

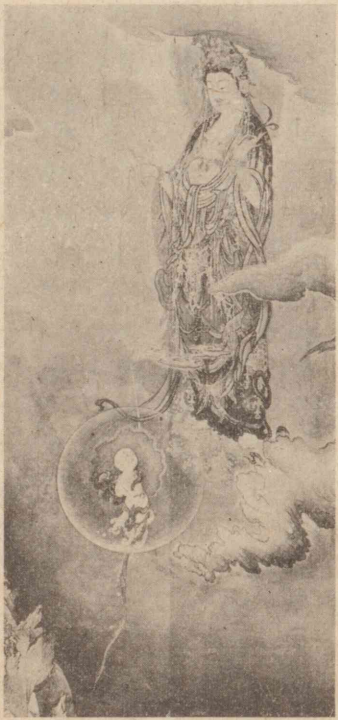
欲する、茲に年
あり、未だ適當
なる形相を得
ずと。此の圖
は翁最後の揮
毫に係り、長逝

に先だつこと僅かに四日、畫がき了りて未だ款を署するに至
らざりしものなり。蓋し翁平生の心事、此の一幅中に留存す
るものあらん。其の筆墨の沈著醇厚にして、賦色の明麗渾融

なるは、近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技道に入るものにして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一様、墨を翫び筆を弄し、花天月地に所謂風流を事とする者と時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫がきたる創造の圖は、歐洲美術の神品と稱せらるゝものにして、氣力豪邁、布置雄大、唯見る雲間の上帝一手を伸ばして大地を指し、倏忽一個の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。此は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督敎造物の主旨と異なる所あり。其の美術上の形相も亦隨つて同じからず。人若し畫裏の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐むべし、此の超凡の技を抱き

Michelangelo
ミケランジェロ
1475—1564
文藝復興期の
イタリアの大
美術家
* *Solan*

たる人は、未だ天下に名を成すに至らずして空しく黄泉の客となれり。然れども其の妙想は竟にミケランジェロをして美を擅にせしめざりき。



悲母觀音圖

翁、姓は狩野、
文政十一年正
月十三日を以
て長州に生ま
る。幼名幸太
郎、少にして松

隣と號す。狩野勝川の門に遊ぶに及んで勝海と稱し、晩年自ら號して芳崖といふ。家世々萩藩の畫師たり。父を晴皐といひ、性豪毅磊落にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、

文政十一年
二四八八年
仁孝天皇の御
代
長州
現山口縣の内
狩野勝川
名は雅信
畫家
木挽町狩野第
十世
法印
江戸の人
明治十三年歿
年五十八
萩藩
長門國萩藩
毛利氏の本藩
晴皐
本名諸葛董信

木挽町狩野家
狩野派木挽町家

狩野與繪師四家の一

その畫所は江戸木挽町(現東京市京橋區木挽町)に在つた

安政六年

二五一九年

孝明天皇の御代

其の子を訓ふること甚だ嚴正なりき。翁が勇邁果敢百敗倒れざるの氣力は、多く先考の鍛錬による。母溫柔貞淑其の愛育慈養は翁の常に追念してやまざる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に起因するなるべし。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤するの筆をして、時として情致纖密、曉露の海棠に墜つるが如き、一種幽婉の變體あらしめたるも、亦先妣の感化に非ざるを得んや。

翁、年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來、螢雪の功を積むこと十有餘年、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯し、當時祕訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年、江戸城本丸燒失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾

周文

室町時代の畫僧

玉潤

夏明遠

仇英

支那明代の畫家

雪舟

室町時代の畫僧

僧

永正三年(二

一六六)

年八十七

馬遠

夏珪

共

に南宋代の畫家

相阿彌

室町時代の畫家・茶人

大永五年(二

一八五)歿

は翁選ばれて之を託せらる。然れども、翁の心中未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開くの必要を感ずるに至れり。

當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本模寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉潤の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自家の制作となすもあり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず、畫家の新案に係るものは、纔かに雲烟と落款とのみ。苟も毫端一揮、美術の風雲を叱咤すべきの人にして、豈區々としてかくの如き兒戲を事とするに忍びんや。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは自然の勢なり。一日童子あり、戯れに虎を畫がく。眼

雪村
室町時代の畫
僧

は是、兩々の丸子、耳は是、雙々の遠山、脚は是、四竿の老竹、斑文五
六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに
喜び、起舞して歎じて曰く、是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村
の氣、亦之に外ならず。畫の要は一意、直到、唯心裏の影を以て
紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所な
り。氣力滿盈の間、豈一點の間筆を著くべけんや」と。人々各、
其の特有の心畫を作為し來らざれば、畫家の自然を盡くした
るものといふべからず。至妙の心は赤子の心に若くはなし。
畫も亦安んぞ赤子の心ならざるべけんや。是よりして筆墨
を童子に與へ、白紙を以て其の畫がく所に換へ、之を祕笈に藏
し、夜靜かに人定まるの後、孤燈を剪つて之を展覽し、大いに畫
中の上乘禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解

橋本雅邦
名は長卿
明治畫壇の大
家
東京美術學校
教授
東京市の人
明治四十一年
歿年七十四

し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と
同日畫所に入る、時に年十三歳なりきと云ふ。此の兩畫伯、一
は雄拔奇豪、一は渾厚著實、共に表裏提携し、新畫の端緒を開き
たるは亦奇緣と云ふべし。

既にして心機漸く熟して形相未だ成らず。彼の新に生面
を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陥り、怪奇百出、
滿幅の風雨魑魅魍魎を奔らせて、同門の嘲を招き、師家の罵に
遭ひぬ。されど、翁自ら信じて一步を退かず、慘澹辛苦嘗めざ
るなく、其の死に先だつこと兩三年にして始めて其の心機と
形相と調和するを得て、畫法の自在を得たるもの如し。天
若し翁に借すに餘年を以てせば、其の造詣する所果して如何
ぞや。觀音其の他の傑作に至つては、畫格遠く古大家の列に

入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しむべし、病を以て長逝す、年六十一時に明治二十一年十一月五日なり。

翁、人となり、内、忠實、溫順にして、外、高邁、俊逸なり。其の父母に至孝なるは、郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、一身節儉を守り、潤筆を得るも之を私せず、郷里に送り以て父母旦夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては、虚心坦懷、好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば喜び拜して之を容れ、其の圖様を改むること屢なりき。其の自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡くさざれば歇まず。翁又謠曲を

愛し、舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事、得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、旁に人なきが如し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。惟ふに、凡そ美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。然れども、或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり、或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものにして、畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、儒道西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判じ、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至る迄、盡く取りて以て畫訣となせり。翁常に言ふ、人各、獨立の宗教なかるべからず。美術家には美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんやと。亦以て其の造詣を見るに足らん。(天心全集)

和辻哲郎
哲學者
文學博士
東京帝國大學
教授
兵庫縣の人
明治二十二年
生

二三 日本繪畫の特性 和辻哲郎

長方形の畫面の上部左寄りに、濃淡を異にする四五の竹葉が墨を以て描かれてゐる。それを受けた淡い竹幹が、左の縁に添うて立つ。その他の大部分の畫面は空白であるが、そのたゞ中に、竹葉のやゝ下に、濃く描かれた一羽の雀が飛んでゐる。かゝる畫の構圖には、いかなる意味でも、シンメトリーといふ如きものは認められない。しかも、そこには寸分の隙間のない釣合が感じられる。何ものも描かれざる空白が、深い深い空間として濃い雀の影と釣合ひ、この雀の持つ力が、淡い竹葉のうち特に際立つて濃くされた二三の竹葉の力と相呼應する。さうして、それ／＼のものが、動かすことの出來な

宋
支那の國號
皇紀一六二〇
一九三九年
元
支那の國號
皇紀一九三一
二〇二八年

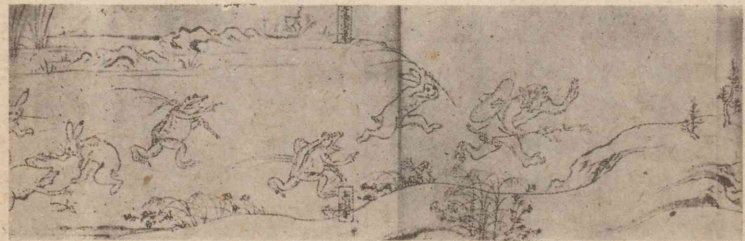


大家納言繪詞

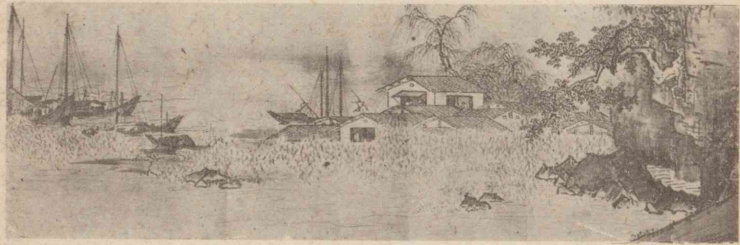
い必然の位置を占めてゐる。このやうな「氣合」としての釣合によつて、物象がたゞ片隅に描かれてゐるやうなこの畫面をも、豊かなままとまりあるものとして感ぜしめるのである。この種のまとめ方は、宋元舶載の小さい畫帖の繪にも、足利桃山から江戸へかけての大きい襖繪屏風繪にも、非常に多く認められる。

が、日本の繪畫のまとめ方の特殊性は、このやうな「氣合」のみではない。「氣合」は、空間藝術として一目に見渡せる場合のまとめ方、即ちシンメトリーや比例に代るもので

あるが、我々の繪畫に於ては、更に時間的な契機を入れた特殊なまとめ方が重要な位置を占める。繪卷物のまとめ方がそれである。西洋の繪畫に於ては、物語を題材とした續きものを描く場合でも、續いてゐるのはたゞ物語の内容だけで、繪自身は一々獨立した構圖を持つか、或は一々獨立しつつ裝飾的な大きい全體にまとめられてゐるかである。然るに繪卷物に於ては、構圖そのものが時間的に展開して行くやうに作られてゐる。物靜かな構圖に始つて、それが徐々に複雑の度を加へつゝ、遂に無數



鳥戲園畫卷



山水長卷

の物象の組合はせによる極度に複雑な構圖となり、やがてまた徐々に單純に歸りつつ極めて簡素な構圖を以て局を結ぶ。それはむしろ音樂の展開のしかたに似たものである。我々はこの集つては散り、散つては集るといふ如き移り變りによつて、しばしば胸を打つ如き美しさを感じさせられる。もとより、この種の繪の各の部分、それだけ切り離しても繪としてまとまつた構圖を持ち得るであらう。しかしそれは、本來展開し行く全體の或一定の部分として作られたものであつて、その部分の意

伴大納言繪詞
三卷
伴大納言善男
の事蹟を描い
たもの
傳藤原光長筆
鳥羽僧正
大僧正
天台座主
戲畫の能手と
傳へられる
保延六年(一
八〇〇)歿
年八十八
鳥獸戲畫卷
四卷
繪卷物
山水長卷
一卷
繪卷物

義は、全體に於て始めて十分に發揮される。伴大納言繪詞の如く、一つの物語を題材とするものはもとよりであるが、鳥羽僧正筆と稱する鳥獸戲畫卷の如き、或は雪舟の山水長卷の如き、全然題材の束縛を受けないものに於ても、全體としての構圖の展開は確に主要事とされてゐる。構圖の移り變りに随つて筆調もまたおのづから移り變つてゐる如きは、展開し行く全體についての十分な理解を示すものといへよう。しかしこの展開の仕方にも、我々は音樂に於けるが如き規則的なものを見出すことが出来ない。それは同じテーマを繰返す展開ではなくて、常に他の姿に移りゆく展開であり、しかも全體として一つにまとまつてゐる展開である。もしこれに比すべきものを求めるならば、それは非合理的な契機に充

たされつゝ、しかも全體的なまとまりを持つてゐる、生の統一
的展開の他にないであらう。この特質は、能樂に於ても、茶の湯に於ても、歌舞伎に於ても、連句に於ても見出し得るところである。

元來、日本人は藝術的な國民として世界に許されてゐる國民であり、また實際、内なるものを直觀的な姿に於て表現する能力に優れた國民である。しかし、ギリシヤ人が、見ることに於て感じたのに對して、日本人が、感ずることに於て見たといふ相異は、見のがすわけに行かない。

(風土—人間學的考察)

國語卷七終



(永井製本) 2/4

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年四月十八日發行
昭和十二年七月十三日訂正再版發行

國語全十卷
定價各冊金五拾五錢

編輯者 岩波編輯部

代表者 岩波茂雄
發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

精興社印刷



發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段二八七・二八八番
銀座口座東京二六二四〇番

